

Y994-J2646



1200701038198

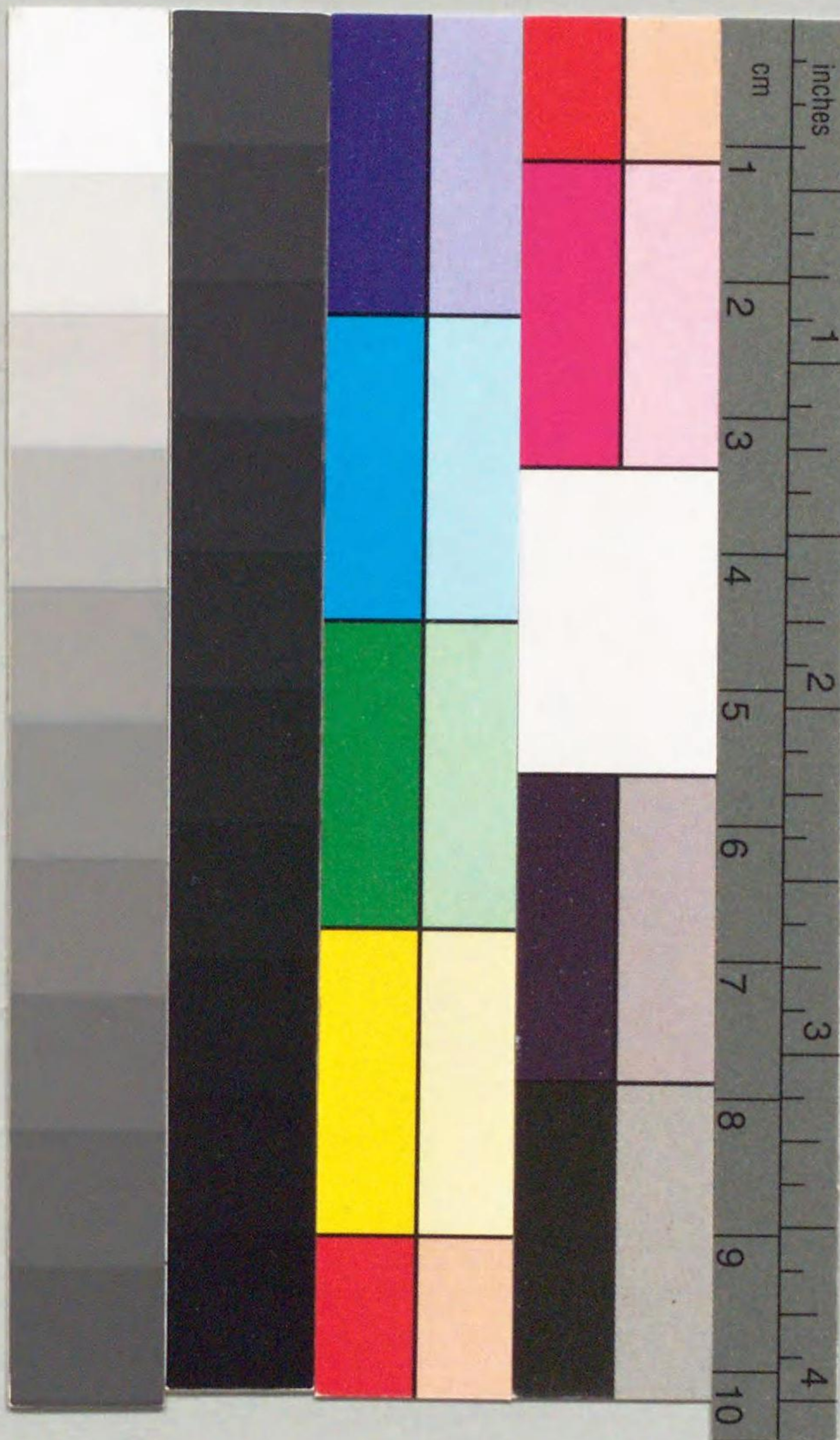
6

マルクス
原著

労賃・価格および利潤

河上 肇 譯

河上 肇編纂*マルキシズム叢書*第五冊



SANSEIDO
KANDA TOKYO

丁

マルクス
原 著

勞賃價格と利潤



河上 肇 譯

原 マルクス
著

勞賃

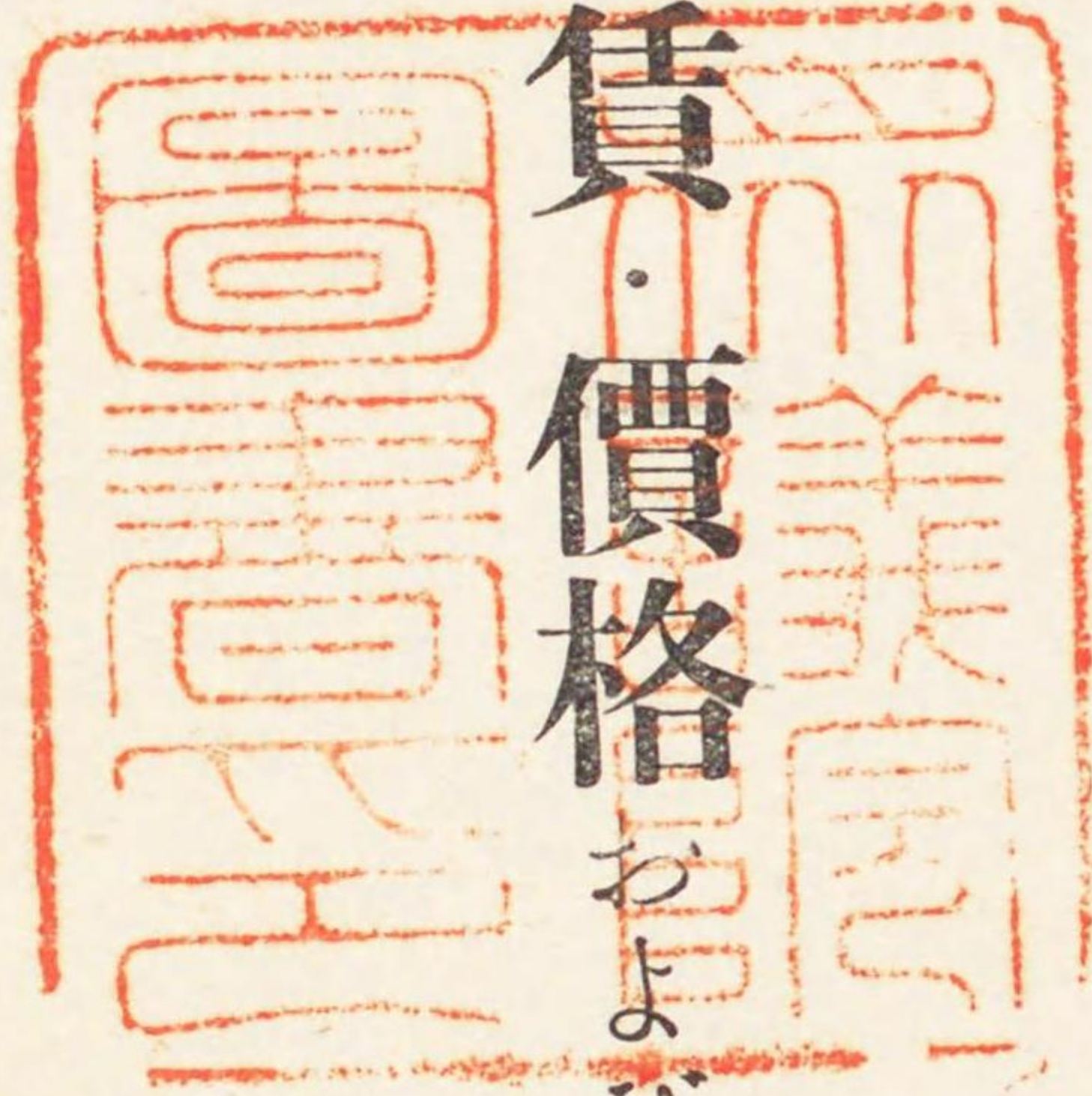
價格

および

利潤

河上

肇 譯



河上 肇編纂*マルキシズム叢書*第五册

原 著 マルクス
勞賃・價格
および
利潤

河上
肇 譯

河上 肇編纂*マルキシズム叢書*第五册

Y994

J2646



I 種
W



1200701038198

目次

新版序言	一	一〇、商品をその価値において賣ることに
譯文例言	三	よつて得らるゝ利潤
序言	一	一一、剩餘価値が分解するに至る種々なる部分
一、労働者が勞賃の値上げを強要するのは無駄なことであるか?	二	一二、利潤、勞賃および價格の一般關係
二、勞賃の騰貴が生産物の分量および價格に及ぼす影響	六	一三、勞賃の値上げが企てられ又はその引下げが抗争せらるゝ主要の場合
三、勞賃の騰落が通貨の増減に及ぼす影響	一八	一四、資本と労働との闘争および其の結果
四、需要供給の法則	二四	
五、勞賃と物價	二七	
六、價值(および價格)と労働	三三	
七、労働力	四四	
八、剩餘価値の生産	四八	
九、労働の價值	五三	

新版序言

吾々はマルクス経済學の骨子を手短かに書き現はしたものと、これ以上適當なものあるを知らない。その頁數は少いけれども、そこには殆ど有らゆる重要な問題が、多少の程度において觸れられてゐる。譯者の補註が多少とも示唆の助けとなるであらうやうに、そこでは、資本論第一卷乃至第三卷で詳細に取扱はれてゐる主要問題の精髓が、簡潔に述べられて居り、また剩餘價值學說史において説かれてゐる若干の問題にも、議論が及んで居る。

原著の序言が示してゐるやうに、これは一八六五年六月二十六日、(今より約六十年前)、マルクスがインタアナシヨナルの總務委員會の席上で述べた演説の草稿に屬する。一八六五年といへば、マルクスが殆ど五十歳に近き頃のことである。當時『經濟學批判』(一八五九年公刊)は既に出版され

て數年を経、また『資本』第一卷(一八六七年公刊)が出版されたのも、それより二ヶ年後のことである。即ち、マルクス經濟學の體系は、當時已に著者の頭腦中にほぼ完成されてゐたのである。

原本はマルクスの生前に公にされたものではない。それはマルクスも死に、エンゲルスも死んだ後に、遺稿の中から發見されたものである。演説の原稿は英語で綴られてあつた。それをマルクスの末女エリーナア (Eleanor Marx Aveling) がその夫エドワード・エーヴリングと共に校訂し、これを一書となして公にしたのである。節を分つてそれに標題を附したのは、これら編者の仕事である。(その標題はこの譯書では二三改められてゐるが、それらは一々補註に明記しておいた)。ドイツ語にはベルンシュタインが翻譯した。イギリス本の標題は『價值、價格、および利潤』(Value,

Price and Profit) となつてゐるが、私はドイツ語の譯本の標題 (Lohn, Preis und Profit) を採つた。

この譯文は、最初(その折は原本の最初の部分約三分の一を省略した)、大正十年(一九二一年)九月に、『社會問題研究』第二十五冊として公にし、更に同年十一月獨立の冊子として刊行し、その後、大正十三年(一九二四年)七月に、宮川實氏の援助を得て、先きに省略せし部分を補足し、これを全譯となして公刊した。『社會問題研究』の發行部數を通算すれば、この譯文は、既に二萬部以上を流布したことになる。しかし吾々は、もつと多く且つ廣くこれを流布する必要を認むるが故に、今回重ねて版を改め、全文六號活字より成る縮刷となし、——それと同時に譯文に若干の訂正と補註を加へ、——定價を安くして、これをこの『マルキシズム叢書』中の一篇に加へた。

譯者は外國語をただ日本語に置き換へたといふ

二

ばかりでなく、著者の言はんとするところを一應理解した上で、譯文に筆を執つたつもりであり、従つて文章の意味の通ぜぬところは、殆どなからうと自信してゐる。だが、譯者の淺學のために(決して無責任のためにはないつもりだが)、なほ誤解してゐる點もあるだらう。それらは、讀者の示教を俟つて、版を改むる毎に訂正してゆきたい、と希望してゐる

大正十五年六月二十九日 河上 肇

譯文例言

一、この譯文の底本として用ひたものは、イギリスの Socialist Labour Party から發行された英語本である。

一、各節の題目は譯者が新たに定めたものもあるが、大部分はイギリス本によつた。それらの區別は、一々補註に明かにしてある。

一、括弧() は原文にあるもの。これと異り、括弧〔 〕内の文字は、譯者が了解の便宜のために補筆したもの。二三の箇所には特にそのことを記載したが、多くは括弧に入れただけにしてある。

一、文字の傍に點々を附したのは、原文——英語——にイタリックを使用してある所に當る。

三

序言¹⁾

諸君、
本論にはいる前に、少しばかりの前置きをする
ことを許して頂きたい。

今や大陸「ヨーロッパ大陸」においては、同盟罷
業といふ真正の流行病と、勞賃の値上げを要求す
る一般的の叫び聲とが、廣く漲つてゐる。この問
題は我が大會において問題となるであらう。諸君
はインタアナショナル・アソシエーションの首腦
として、この重大問題について確固たる定見を持
つてゐなければならぬ筈である。だから私として
は、諸君に最もひどい退屈な思ひをさせるといふ
危険を冒しても、この問題に十分深入りするの
が、自分の義務だと考へる。

〔註一〕 イギリスの Socialist Labour Party
から發行されたものには、この序言を省い
てある。

〔註二〕 一八六五年九月に開かるべきインタ

アナショナル・ウオーキングメンズ・アソ
シエーション——國際労働者同盟——の大
會を指す。

〔註三〕 今マルクスが此の話をなしたところある
場所は、前の註に述べたインタアナシヨナ
ル・ウオーキングメンズ・アソシエーシヨ
ンのヂエネラル・カウンシル——國際労働
者同盟の總務委員會——の席上であり、時
は一八六五年六月二十六日である (Drain,
Marx-Bibliographie, 1920, S. 38. 参照)
も一つの前置きを私はウエストン君¹⁾についてせ
ねばならぬ。彼は労働者階級のためだと考へて、
労働者階級に最も不人望だと自ら知れる意見を
ば、ただに諸君に「即ち此のインタアナシヨナル
の總務委員會に」提議したばかりでなく、それを
公然と辯護してきた。かゝる眞勇の發揮は、吾々
の總べてが大に敬意を表さねばならぬところであ

る。今私は、彼れの議論をば、その現在の形では、理論的には誤謬であり且つ實際的には危険であると考へざるを得ないけれども、しかし私は、私の論文の調子がむき出しであるに拘らず、その結論においては、彼れの議論の根底に横はつてゐる正當な思想だと私に思はれるところのものに私が一致しつゝあることを、彼が見出すに至るであらうことを希望する。

さて私は今直ちに進んで、吾々の前にある仕事に取掛るであらう。

〔註四〕 デモン・ウェストンはオウエン派の社

一、労働者が勞賃の値上げを強要するのは無駄なことであるか？

ウェストン君の議論は實際二つの前提に基づいてゐた、その第一は、國民の生産額は或る一定したもの、即ち數學者のよく云ふ或る不變の分量または大きさのものである、と云ふことである。

第二は、眞實勞賃 real wages の額、即ちそれ「貨幣の形で受取つた勞賃、即ち眞實勞賃に對する nominal wages —— 名目勞賃」を以て買ひ得る諸商品の分量によつて測定された勞賃の額は、

一定したもの、即ち不變の大きさのものである、と云ふことである。

〔註一〕 標題は、ベルンシュタインのドイツ譯には「國民生産物と勞賃の分前」となし、イギリス本には「生産と勞賃」としてある。

さて、彼れの第一の主張は明かに誤謬である。諸君の知らるゝやうに、年々歳々生産物の價值と分量とは増加し、國民勞働の生産力は増加し、そうしてこの遞増する生産物を流通させるために必要な貨幣の分量も絶えず變動してゐる。一年の終りにおいて、また相異なる數年を互に比較することにおいて、眞實であるところのものは、「即ち或る變動が見られると云ふことは」、同じ年の平均日〔例外は別として〕の各々にとつても、やはり眞實である〔即ち變動が見られる〕。國民生産物の量または大きさは、絶えず變動してゐるのである。その大きさは不變ではなくて可變である、そうして人口の變動を離れて見ても、資本の蓄積と勞働の生産力とに絶えざる變動があるから、それは實に

會主義者であつて、インタアナショナルの有力な委員の一人である。彼は之より前、總務委員會の席上で、勞賃に關する論文を朗讀した。彼れの意見によれば、勞賃の額は生産物の額によつて決定されるものであるから、労働者が同盟罷業によつて一般の勞賃率を高めやうとすることは、労働者階級全體の利益から見て、畢竟無益であると云ふのであつた。堺利彦・山川均兩氏著『マルクス傳』(大正九年刊)、一八六頁參照。

そうでなくてはならない。一般勞賃率の騰貴が假りに今日起つたとしても、その終局の結果はともかく、その騰貴が、それだけで、直ぐに生産額を變動させないといふことは、勿論眞實である。それ「勞賃率の騰貴」は、さしあたり、現在の事態「國民生産額」のもとに生ずるであらう。しかし「私が考へる如く」勞賃の騰貴以前に、國民生産物「の分量」が可變であつて一定してはゐなかつたものとすれば、それは勞賃騰貴の後にも、やはり可變であつて一定してはゐないであらう。

だが國民生産額は可變でなくて不變であると假定しやう。さうした時ですら、我等の友人ウェストンが論理的歸結だと考へるところのもののは、やはり理由のない主張たるを免れぬであらう。今一定の、例へば八といふ數があるとすると、この數の絶對的限界は、その諸部分がそれら相互の相對的限界を變ずることを妨げるものではない。もし利潤が六で勞賃が二であるとすれば、勞賃を六に増加し利潤を二に減少しても、總量は尙ほ依然と

して入である。だから生産額が一定してゐるからと云つても、それは決して賃額が一定してゐるといふ證明にはならぬ。しからば、我等の友人ウエストンは、如何にしてその一定不變なることを證明せんとするのか？ 曰く、それを主張することによつて。²⁾

〔註二〕 人は或事を主張することによつて、しばしばこれを證明し得たりと考へる。その一例としてのブルードン——Herr Prudhon beweist es, indem er es behauptet. Wir haben es gesehen: behaupten heisst für ihn beweisen, wie voraussetzen leugnen heisst. (ブルードン君はこれを主張することによつて之を證明する。こゝにおいてか知る、彼にとつては、主張することは即ち證明することであり、假定することは即ち否定することになるのである)。
Elend der Philosophie, S. 131. 淺野堯氏譯『哲學の貧困』二五四頁。

引下げの企または行動に對して、労働者が反動を起すのは、正しい行動だといふことにならう。ところで賃額の引下げに對する有らゆる反動は、やがて賃額の値上げのための動であるから、つまり労働者が賃額の値上げを強制するのも、正しい行動だといふことにならう。それだから、ウエストン君自身の賃額不變の原則に従ふも、労働者たちは、一定の事情のもとでは、賃額の値上げのために、團結し且つ闘争せねばならぬこととなる。

もし彼がこの結論を否定するならば、彼はその結論の依つて生ずる前提をも捨てなければならぬ。〔即ち〕彼は、賃額不變の分量であると言つてはならない、寧ろ、それは引上げ得られないし、また引上げてはならぬが、しかし資本〔資本家〕がそれを引下げたいと思ふならば、いつでも、それは引下げ得られるし、また引下げられねばならぬ、と言ふべきである。〔そこで此の説に従へば〕、もし資本家が、諸君を肉の代りに馬鈴薯で、小麦の代りに燕麥で養ひたいと思ふならば、諸君

しかし假りに一步を譲つて彼れの主張を正しとするも、——彼はたゞ一方にのみ議論を進めるに拘らず、——實はその同じ理論が兩方面に等しく適用され得るのである。〔即ち〕もしも賃額が或る不變の大きさのものとすれば、それは増加することも減少することも出来ない筈である。だから若し賃額の一時的値上げを強制せんとする労働者の行動が愚であるならば、賃額の一時的引下げを強制せんとする資本家の行動もまた同様に愚であらう。我等の友人ウエストンは、〔一方においては〕一定の事情のもとでは、労働者が賃額の値上げを強制し得ることを否定しない、たゞ賃額は自然的に一定してゐるので、後で必ず反動が起らねばならぬといふのだ。他方において、彼はまた、資本家が賃額の引下げを強制し得ること、また實際それを強行せんと絶えず努めてゐることを、認め得る。〔ところで〕かの賃額不變の原則に従へば、前の場合と等しくこの後の場合にも、或る反動が引續き起る筈である。さすれば、〔資本家の〕賃額

は喜んで彼れの意志を經濟學の一法則として受け容れ、それに従はねばならない。またもし或る國における賃額率が他の國におけるよりも、例へばアメリカにおける方がイギリスにおけるよりも、高いならば、諸君はこの賃率の差を、アメリカの資本家の意志とイギリスの資本家の意志との差によつて、説明しなければならぬのである。——この方法は確かに、ただに經濟現象の研究のみならず、すべての他の現象の研究をも、大いに單純化するに相違ない。

〔註三〕 『人間は、彼等の生活の社會的生產において、一定の、必然的の、彼等の意志から獨立した關係を受取る』。人間の意志から獨立したところの、人間がそれを欲すると否と、またそれを意識すると否とに係りなく存在するところの、客觀的法則を發見することが、經濟學の任務である。

しかしその場合においてすら、吾々は質問を發し得る、——何故アメリカの資本家の意志はイギ

リスの資本家の意志と異つてゐるか？ そうして此の質問に答へるためには、諸君は意志の範圍以外に出なければならなくなる。或は人あつて、神はフランスにおいては一つの事を意志し、イギリスにおいては他の事を意志する、と説明するかも知れない。「そうして」もし私が「更に」彼に向つて、意志のこの二元性の説明を求めたなら、彼は鐵面皮にも、神はフランスにおいては一つの意志を持ちイギリスにおいては他の意志を持つことを

二、勞賃の騰貴が生産物の分量および價格に及ぼす影響¹⁾

〔註一〕 標題は、イギリス本には『生産、勞賃、利潤』となし、ドイツの譯本には『勞賃の變動が生産物の分量および種類に及ぼす影響』としてある。

ウェストン君が吾々に向つて讀まれた演説は、恐らくこれを一言に縮めてしまふことが出来たて

意志する、と答へるかも知れない。だが、我等の友人ウェストンに至つては、斷じてそんな、すべての推理を否定しきつた議論をする人ではない。資本家の意志は確かに、できるだけ多く取らうとするにある。だが我々の仕事は彼れの意志について語ることはなくて、彼れの力、その力の限界、およびこれら限界の性質を研究することである。

あらう。

彼れの總べての推論は斯ういふことに歸する、もし勞働者階級が資本家階級を強制して、貨幣勞賃の形で四シリングの代りに五シリングを支拂はしむるならば、資本家は商品の形で「勞働者が資本家的商品を買ふために支拂ふ五シリングに對し

て」四シリングの價値を返すであらう。「即ち」勞働者階級は、勞賃の値上げ以前に四シリングで買つたものに對して、五シリングを支拂はねばならぬやうになるだらう。しかし何故さうなるのであるか？ 何故資本家は五シリングに對して單に四シリングの値打だけのものを返すに止まるのか？ それは勞賃の額（それを以て買ひ得る諸商品の分量で測つた勞賃、即ち眞實勞賃の額）が一定してゐるから。しかし何故それは四シリングだけの値打の商品に一定してゐるのか？ 何故三シリングとか二シリングとか或はその他の或る額に一定しないのか？ もし勞賃額のこの制限が、資本家の意志からも、また勞働者の意志からも一様に獨立してゐる、一つの經濟法則によつて決定されるものならば、ウェストン君の先づ第一に爲すべきことは、その法則を記述し且つそれを論證することにあつた筈だ。それから更にまた彼は、あらゆる一定の時に對して事實上支拂はれる勞賃額が、いつでも正確に必然的の勞賃額に相當して居り、決

してそれと背離してゐないと云ふことを、證明すべきであつた。「しかるに」もし他方において、勞賃額についての一定の限度が、資本家の單なる意志に、或はその貪慾の限度に基づいてゐるものとするならば、それは勝手次第な限度である。それには何等必然的のものがない。それは資本家の意志によつて變化され得るし、従つてまた、彼れの意志に逆つても變化され得るものとなるであらう。

ウェストン君は自分の説を例證するために、或る一定量のスープを盛つた一個の鉢があつて、これを或る一定數の人々が飲む場合には、スプーンの廣さを増したからとて、そのためにスープの分量が増加することはないだらう、と諸君に話した。彼に對しては誠にすまないわけだが、この例が私には可なり甘いものに見える。それは私に、メネニウス・アグリッパの用ひた喩をちよと思ひ出さしめる。ローマの平民たちがローマの貴族たちに對して反抗した時に、貴族のアグリッパは平

民だちに告ぐるに、貴族といふ腹は同じ政治團體に屬する平民といふ手足を養ふ、といふことを以てした。「けれども」アグリッパは、吾々が或る人の腹を充すことによつて別の人の四肢を養ひ得ると云ふことを、證明し得なかつた。今ウェストン君の忘れたところは、労働者だちが食物を其れから得つゝある鉢は、國民労働の全生産物で充たされてゐるといふことゝ、且つ彼等が其れからより多くを取つて來ることができないのは、鉢が狭いからでも、その内容が少ないからでもなくて、ただ彼等のスプーンが小さいからだといふことゝである。

〔註二〕 原文には spoony とある。それが前の spoon に響いてちよつと皮肉に聞える。

如何なる仕掛けによつて、資本家は、五シリングに對して四シリングの値打しかないものを返すことが出来るか？ それは彼が賣るところの商品の價格を値上げすることによつて。しからば今そ

の商品の價格の値上げ、より一般的に云へばその變動、つまり商品の價格そのものは、資本家の單なる意志に依存してゐるのか？ それとも、これに反して、その意志を實現するためには、一定の事情が必要とされてゐるのか？ もしその必要がないとすれば、市場價格の騰落すなはち絶えざる變動は、一個の解くべからざる謎となる。

吾々が假定したやうに、労働の生産力にも、使用される資本および労働の分量にも、また之によつて生産物の價値が評價されるところの貨幣の價値にも、何等の變動がなくて、ただ單に勞賃率にのみ變動があつた場合に、一體如何にしてその勞賃の騰貴が、諸商品の價格に影響し得るのであるか？ 曰く、それはただ單に、これらの諸商品に對する需要とその供給との間における事實上の比例に影響することによつてのみ。

勿論、労働者階級は、これを全體として考へると、その所得をば生活必需品に費して居り、また費さざるを得ないのである。だから勞賃率の一般

的騰貴は、生活必需品に對する需要の増加を、從つてまた、その市場價格の騰貴を惹き起す。そこで此等の生活必需品を生産する資本家だちは、彼等の「生産する」商品の騰貴せる市場價格によつて、騰貴せる勞賃を埋め合はすであらう。しかし生活必需品を生産しない他の資本家だち「即ち贅澤品を生産する資本家だち」はどうであるか？

諸君は彼等が少數であると思つてはならない。もし諸君が、「イギリスの」國民生産物の三分の二は人口の五分の一——下院の一議員は最近に人口の七分の一に過ぎないと述べた——によつて消費されてゐる、といふ事實を熟考するならば、諸君は、國民生産物の如何に莫大なる割合が、贅澤品の形において、或は贅澤品と交換「外國で生産せられた贅澤品との交換を指す」するために、生産されねばならないか、そうして生活必需品そのものゝ如何に莫大な分量が、家庭の使用人や馬や猫などに浪費されねばならないか、——尤もこの浪費は、吾々の經驗に照せば、生活必需品の價格の

騰貴につれて、必ず大に制限されるものではあるが、——を了解するであらう。

さて生活必需品を生産しない此等の資本家の地位はどうであらうか？ 彼等は、勞賃の一般的騰貴の結果生ずる利潤率の下落を、彼等の「生産する」商品の價格の騰貴によつて、埋め合はすことはできない。何故なれば、これらの商品に對する需要は増加しないであらうから。そこで彼等の所得は減少する、しかも此の減少した所得のなかから、彼等は、價格の騰貴した生活必需品の同一分量を得るために、「以前よりも」より多くを支拂はねばならない。けれども單にこれ許りではない。彼等の所得が減少するにつれて、彼等が贅澤品に費す金は少くなり、從つて彼等の「生産する」それらの商品に對する彼等相互の需要が減少する。

この需要減少の結果として、彼等の商品の價格は下落するであらう。だから此等の産業部門においては、利潤率の下落は、ただに勞賃率の一般的騰貴に單比例をなすのみでなく、勞賃の一般的騰

貴、生活必需品の價格の騰貴、および贅澤品の價格の下落に複比例するであらう。

別々の産業部門に用ひらるゝそれぞれの資本に對して生ずる利潤率のこの差異は、如何なる結果を齎らすであらうか？ 云ふまでもなく其れは、何等かの理由で平均利潤率が、別々の生産部門において差異を生ずるに至つた時、いつも一般に生ずる結果と同じものである。資本と労働とは、利益の少ない部門から利益の多い部門に向つて移動するであらう、そして此の移動の進行は、一産業部門における供給がその増加した需要に釣り合ふまで増加し、他の部門における供給がその減少した需要に釣り合ふまで減少するに至つて止むであらう。この變動が完了すると、一般利潤率は別々の諸部門において再び平均さるゝに至るであらう。蓋し總べての狂ひは元と、別々の商品に對する需要とその供給との比例における單なる變動のためにのみ生じたのであるから、その原因が止めばその結果も止み、そして物價はその以前の

水準と平衡とに復するであらう。「かくて」勞賃騰貴のために生ずる利潤率の下落は、ある産業部門に限られることなくして、一般的のものとなるであらう。さきの假定に従へば、労働の生産力にも、生産の總額にも、何等の變動は起らず、たゞ生産物の一定額がその形態を變ずるに止まるであらう。「即ち」生産物のより多くの部分が生活必需品の形で存在し、そのより少き部分が贅澤品の形で存在することになるか、或は、結局同じことになるのだが、より少き部分が外國の贅澤品と交換され、より多くの部分がその本來の形において「即ち生活必需品のまゝ」消費されることになるか、或は、これもまた同じことになるが、國內生産物のより多くの部門が外國産の贅澤品との代りに生活必需品と交換されるに至るであらう。かくて勞賃率の一般騰貴は、一時的に市場價格を攪亂した後、諸商品の價格には何等永久的の變動を残すことなくして只だ利潤率の一般的下落を齎すに止まるであらう。

〔註三〕『より多くの部分が』はドイツ譯によりて補ふ。

以上の議論において私が剩餘勞賃〔勞賃の騰貴のため増加した部分〕の全部をば生活必需品にのみ費されると假定してゐることを、もし非難する者があるならば、私はそれに答ふるに、私はこの假定をばウエストン君の意見に最も有利なやうにしたのだと云ふことを以てする。もしも剩餘勞賃が、労働者の消費範圍に以前は屬してゐなかつた品物の上に費されるものとすれば、彼等の購買力が眞に増加したと云ふことは、一目瞭然であらう。けれども彼等の購買力の増加は、勞賃の増進〔騰貴〕からのみ生ずるのであるから、それは正確に資本家の購買力の減退と相對應する筈である。だから諸商品に對する總需要は増加しないで、たゞその需要の構成部分が變動するのみであらう。一方における需要の遞増は他方における需要の遞減によつて平均されるであらう。此の如くして總需要は不動の状態を保ち、商品の市場價格には何

等の變動も起り得ないであらう。

そこで吾々は次のディレムマに達する、剩餘勞賃〔勞賃率騰貴のために増加した部分の勞賃〕は總べての消費財〔生活必需品ならびに奢侈品〕に一樣に費されるか、——この場合には労働者階級の側における需要の膨脹は、資本家階級の側における需要の收縮によつて埋め合はされねばならぬ、——或はまた剩餘勞賃はたゞ或る種の品物〔生活必需品〕にのみ費されて、そのものの市場價格が一時的に騰貴するか。この〔後の〕場合には、その結果として生ずるところの、或る種の産業部門における利潤率の騰貴と、他の種の産業部門における利潤率の下落とが、資本と労働との分配〔各種の産業部門に向つての分配〕に變動を來し、そして終に供給が、前の産業部門においては増進した需要に釣り合ふまで増加され、後の産業部門においては減退した需要に釣り合ふまで減少されるであらう。〔要するに〕前の假定の下においては、諸商品の價格には何等の變動も起らないであら

う。後の假定の下においては、市場價格の多少の動搖の後、諸商品の交換價值は以前の水準に落ちつくであらう。「即ち」何れの假定のもとにおいて、勞賃率の一般的騰貴は、結局、たゞ利潤率の一般的下落を生ずるに過ぎないであらう。

諸君の想像力を煽るために、ウェストン君は、もしイギリスの農業勞賃が一般に九シリングから十八シリングに騰貴したならば、如何なる困難が生ずるかを考へて見給へ、と云つた。生活必需品に對する需要の莫大なる増加と、そのために生ずる之が價格の恐るべき騰貴とを考へて見給へ！と氏は叫んだ。さて、諸君の總べてが知つて居られるやうに、アメリカの農業勞働者の平均勞賃は、イギリスの農業勞働者のその二倍以上であるが、農業生産物の價格はアメリカの方がイギリスよりも低いに拘らず、また資本と勞働との一般的關係はアメリカにおいてもイギリスにおけると同様であり、そうして年々の生産額もイギリスにおけるよりはアメリカにおける方が遙かに少いに

拘らず、アメリカの農業勞働者の平均勞賃は、イギリスの農業勞働者のその二倍である⁴⁾。しかしらば、なぜ吾々の友人は斯かる警鐘をならすのか？それは單に、吾々の前に横はる眞の問題を外らすためにだ。九シリングから十八シリングへの勞賃の突飛なる騰貴は、百パーセントに上る突飛なる騰貴である。「けれども」今吾々は、イギリスにおける一般勞賃率突然百パーセントも騰貴し得るか否か、といふ問題を議論してゐるのでは全くない。吾々にとつてその騰貴の大きさは全く用がない、それは各々實際の場合において與へられたる事情に依存し且つそれに適應しなければならぬものである。吾々はたゞ、勞賃率の一般的騰貴が——たとひそれは一パーセントに限られたものであつても——如何なる働きをなすかを明かにすべきである。

〔註四〕 イギリスの社會勞働黨から出した版本における Lucian Senial の脚註。——「マルクスがこの文章を書いてから、既に三十

五年(今から言へば殆ど六十年)を経過したが、その間、英米兩國の相對的事情は、ただに農業においてのみならず、生産の總べての方面に亘つて、著しき變化を経たと云ふこと、しかしそれは、マルクスの議論および結論に何等の影響をも與へぬと云ふことは、殆ど言ふを俟たぬであらう。』

ウェストン君の空想的なる百パーセントの騰貴は姑くこれを含き、私は諸君の注意を、一八四九年乃至一八五九年にイギリスに起つた現實なる勞賃の騰貴に向けたく思ふ

諸君は皆、一八四八年以來採用された十時間法、正確に言へば十時間半法なるもの「勞働時間制限法を指す」を知つてゐる。これは吾々の目撃せる最も大なる經濟的變動の一つであつた。それは或る地方的の事業においてではなく、英國が依つて以て世界の市場を支配してゐるところの、主要なる諸産業部門において生じた、突然にして且つ強制的なる勞賃の騰貴であつた。「しかも」そ

れは妙に都合の悪い事情のもとでの勞賃の騰貴であつた。ユーア博士や、シーニョア教授や、その他中産階級の總べての經濟的御用代辯者たちは、——私は敢ていふ、それは確に我がウェストンの場合はより遙により有力な證據に基づいて、——それは英國産業の葬鐘を鳴らすものだと言明した。彼等の證明したところは、それは「勞働時間制限法は」ただに勞賃の單純なる騰貴に歸着するのみでなく、使用される勞働量の減少のために誘發され且つそれを基礎とするところの、勞賃の騰貴に歸着する、と云ふことであつた。彼等の主張したところは、吾々が資本家から奪はうと欲した第十時間目こそ、正に資本家が其れから彼れの利潤を獲得したところの唯一の時間だ、と云ふことであつた。⁵⁾ 彼等はこれのために資本蓄積の減少、物價の騰貴、市場の喪失、生産の縮少、その結果として生ずる勞賃への反動、窮極の破滅が起ると威嚇した。實際彼等は、マキシミアン・ロープスビアーの「生活必需品に關する」最高價格法⁶⁾もこれ

に較ぶれば物の數にも入らぬ、とまで明言した、
 そうして彼等は或る意味では正しかつたのである。
 さて、その結果はどうであつたか？ 労働日
 「一日の労働時間」の短縮にも拘はらず、工場労働
 者の貨幣賃の騰貴、雇用せらるゝ職工數の大なる
 増加、彼等の生産物の價格の引き續いての下
 落、彼等の労働の生産力の驚くべき發達、彼等の
 「生産せる」商品に對する市場の未曾有なる暴進的
 擴張が即ちそれであつた。マンチェスターで、一
 八六〇年に、科學進歩協會の會合の席上で、私が
 親しく聞いたところだが、當時ニューマン氏は、
 彼や、博士ユーアや、シーニョアや、その他經濟
 學の御用論者たちは皆な間違つてゐて、民衆の本
 能の方が正しかつたと云ふことを、告白した。私
 がこゝにフランシス・ニューマン教授でなくダブ
 ルユー・ニューマン氏を挙げたのは、彼が、一七九
 三年から一八五六年に至る間の、物價の歴史を研
 究したあの立派な書物、トマス・トウーク氏の『物
 價史』の寄稿者および編輯者として、經濟學上顯

著な地位を占めてゐるからである。我等の友人ウ
 エストンの固定的な考が、即ち勞賃額は固定した
 ものであり、生産額も固定したものであり、労働
 の生産力の程度も固定したものであり、資本家の
 意志も固定的な且つ恒久的なものであり、その他
 何もかも彼れの云ふやうに固定的且つ斷定的なも
 のであると云ふ考が、もし正しいとするならば、シ
 ニョア教授の悲しい豫言は正しかつたであらう
 と同時に、かのロバート・オウエン——已に一八
 六一年に、労働日(一日の労働時間)を一般的に制
 限することが労働階級解放の準備の第一歩である
 と聲明し、そうして實際に一般の偏見をもつとも
 せず、ニュー・ラナアクの彼れの紡績工場におい
 て、獨力を以て之を實現したる彼れ——は、却て
 誤つてゐたであらう。

〔註五〕拙著『資本論略解』第一卷第三分冊、

七一、七二頁参照

〔註六〕 Maximilian Robespierre's Maxim-
 um Laws.

(註七) Society for the Advancement of
 Science.

十時間法の採用および其の結果としての勞賃の
 騰貴が起つたのと丁度同じ期間に、色々の理由の
 ために——その理由をこゝに列擧するのは所を得
 ないであらう——イギリスにおいては、農業勞賃
 の一般的騰貴が起つた。

私の直接の目的のためには必要のないことだけ
 れど、諸君の誤解を防ぐため、私は茲に若干の前
 置としての注意をなすであらう。

或る人が毎週の勞賃二シリングを得てゐた場合
 に、その勞賃が四シリングに騰貴したとすると、
 勞賃率は百パーセントだけ騰貴したことになる。
 これは勞賃率の騰貴として言ひ表はすと、非常に
 すばらしいものと思へるが、しかし實際の勞賃額
 たる毎週四シリングの高は、依然として極めて少
 ない食ふか食はずの端くれ金に過ぎない。それだ
 から諸君は勞賃の率に關する仰々しいパーセンテ
 ーヂに心を奪はれてはならない。諸君は常に問は

ねばならぬ、初めの「一定の率の騰貴なせる以前
 の」勞賃額はいくらであつたかと。

更に解りきつたことだが、毎週二シリングづつ
 を受けとるもの十人と、五シリングづつを受けと
 るもの五人と、毎週十一シリングづつを受けとる
 もの五人とがあるならば、その二十人のものを一
 緒にすると、毎週百シリング即ち五ポンドを受け
 とることになる。そこで彼等の毎週の勞賃總體の
 額の上に或る騰貴、例へば二十パーセントの騰貴
 が生じたとすれば、それは五ポンドから六ポンド
 に増進するであらう。「かゝる場合に」平均をとれ
 ば一般勞賃率は二十パーセントだけ騰貴したと言
 ひ得るが、しかし實際においては、その中の十人
 の勞賃は依然として元のまゝであり、その一組の
 五人の勞賃はただ五シリングから六シリングに騰
 貴しただけであり、そうして他の一組の五人の勞
 賃が五十五シリングから七十シリングに騰貴した
 といふ場合もある。「もしさうだとすると」その人
 達の半数は彼等の地位を少しも改善しないし、四

分の一は殆んど眼に見えない程度にのみ改善し、ただ「残りの」四分の一のみが眞に彼等の地位を改善したであらう。それでも尙ほ平均で計算すると、これら二十人の勞賃の總額は二十パーセントだけ増加したことになり、そうして彼等を使用する總資本および彼等の生産する諸商品の價格が關係する限りにおいては、彼等の總べてが一様に勞賃の平均的騰貴に與かつたのと全く同じであるだらう。農業勞働の場合には、標準勞賃がイングランドンおよびスコットランドの種々な州で非常に相違してゐたので、勞賃騰貴の勞働者に及ぼす影響は甚しく不同であつた。

最後に注意して置くが、あの勞賃騰貴の起つた期間には、ロシア戰役の結果の種々の新租税が課せられたる如き、廣く農業勞働者の住宅が破壊されたるが如き、種々の相殺力が働いてゐたのである。

さて、これだけの前置きをして置いて、進んで述ぶべきことは、一八四九年から一八五九年まで

してどうであつたか？ ロシア戰役があり、且つ一八五四年から一八五六年まで引き續いての不作があつたにも拘はらず、イングランドの主要農産物たる小麥の平均價格は、一八三八乃至一八四八の諸年には一クオーター約三ポンドであつたものが、一八四九乃至一八五九の諸年には一クオーター二ポンド十シリングに下落した。これは、四十四パーセントに上る農業上の勞賃の平均的騰貴があつたに拘はらず、それと同時に十六パーセント以上の小麥の價格の下落があつた、と云ふことである。この同じ期間において、その始めと終りとを、即ち一八四九年と一八五九年とを比較すると、公の被救恤者の數は九三四、四一九から八六〇、四七〇に減少し、その差は七三、九四九であつた、なるほど之は非常に少ない減少に相違ない、さうして、それすら次の數年には再び無くなつたが、しかしそれでも、やはり減少には違ひない。穀物條例が廢止されたために、一八四九年乃至一八五九年の期間には、一八三八年乃至一八四八

の間に、イギリスにおける農業勞賃の平均率は、殆んど四十パーセントの騰貴をなしたと云ふことである。私はこの私の主張を立證するため諸君に向つて十分詳細な話をする事が出来るが、しかし現在の目的のためには、諸君に、一八六〇年故ザヨン・シー・モルトン氏がロンドン技術協會で讀んだところの、*The Forces used in Agriculture* といふ眞面目な批評的な論文を指示するだけで十分だと考へる。モルトン氏は、スコットランドの十二州およびイングランドの三十五州に住める約百人の農夫から集めたところの、諸々の勘定書やその他の信憑すべき書類に基づいて、この報告書を作つたのである。

「農業勞働者の勞賃は斯様に騰貴したのだから、今我等の友人ウェストンの意見を正しとすれば、さうして同時に起つた工場勞働者の勞賃の騰貴をも併せ考ふれば、一八四九年乃至一八五九年の期間には、農産物の價格の上にすばらしい騰貴が起つてゐなければならぬ筈である。しかし事實は果

年の期間に比較して、外國穀物の輸入が二倍以上だつたと云つて差支えない。そうしてその結果はどうであつたか？ ウェストン君の立場に従ふものは、外國市場に對するこの突然な、莫大な、且つ繼續的な需要の増加は、外國市場における農産物の價格を驚くべき高さに騰貴せしめたに違ひない、と豫期するであらう、需要増加の影響は、それが國外から來ても國內から起つても、變りのあるべき筈はないから。「ところで」事實は果してどうであつたか？ 不作の數年を除くれば、あの全期間内、穀物の價格が破滅を來たすほど下落したために、フランスではそれが絶えず世論の題目となつた、アメリカ人は再三再四、彼等の生産物の剩餘を焼かねばならなかつた、さうしてロシアは、もし吾々がウルクハルト氏を信ずべきであるならば、自國の農業輸出品が、ヤンキーの競争のためにヨーロッパの市場で賣り捌けなくなつたものだから、合衆國における南北戰爭をたきつけたのである。

ウェストン君の議論は、これを抽象的の形に還元すると、こういふことになる。すべて需要の増加は必ず一定の生産額の基礎の上に生ずる。だから需要の増加は、決して需要される諸商品の供給を増加し得るものではなく、單にそれら商品の貨幣價格を騰貴せしめ得るに過ぎない。さて、ちよと考へれば直ぐ解るやうに、或る場合には、需要が増加しても諸商品の市場價格は全く變化しないし、そうしてまた他の場合には、需要が増加すると市場價格が一時的に騰貴し、次いで供給が増加し、次いでその價格が元との水準に、そうして多くの場合には元との水準以下に下落するものである。需要の増加が剰餘の勞賃〔勞賃が騰貴したた

めに増加した部分の勞賃〕から生ずるか、或は何か他の原因から生ずるかは、少しもこの問題の條件を變化するものではない。「しかるに」ウェストン君の立場からは、この一般的現象を説明するのも、勞賃騰貴といふ例外的事情のもとに起る現象を説明するのも、共に同じやうに困難であつた。だから彼れの議論は、吾々の論じてゐる問題に對しては、何等特殊の關係を有たなかつた。彼れの議論はたゞ彼が、需要の増加は結局市場價格の騰貴を齎すものでなくて、寧ろ供給の増加を齎すものであるといふ法則を明かにするため、如何に當惑してゐるか、を表はしてゐるに過ぎない。

三、勞賃の騰落が通貨の増減に及ぼす影響¹⁾

討議の第二日に、我等の友人ウェストンは、彼れの古い主張を新しい形式で裝うた。彼は言ふ、貨幣勞賃が一般的騰貴をすると、その勞賃を支拂ふ

ために、より多くの通貨が必要とされるに至るであらう。通貨〔の量〕は一定してゐるのに、如何にしてこの一定した通貨〔の量〕を以つて、増加した

貨幣勞賃を支拂ふことができるのか？ 最初の困難〔これは前の章に論じた問題〕は、勞働者の貨幣勞賃が騰貴したにも拘らず、勞働者の手に歸すべき商品の分量が一定してゐるために生じた。今はそれが〔これは以下本章で論ずる問題〕、商品の分量が一定してゐるにも拘らず、貨幣勞賃が騰貴するため生ずる。言ふまでもなく、もし諸君が彼れの最初の獨斷を排斥するならば、彼れの第二の難題も自から消え去るであらう。

〔註一〕 ドイツの譯本には『勞賃の變動（騰落）と通貨の變動（増減）』と題し、イギリス本には『勞賃と通貨』と題する。

けれども私は、この通貨問題が、今吾々の前にある題目と、全く何等の關係を有たないことを示すとしやう。

諸君の國〔イギリス〕においては、支拂の機構がヨーロッパの他のどの國におけるよりも遙によく完成されてゐる。銀行制度が擴張され集中されてゐるお蔭で、同一量の價值を流通させるために、

従つてまた、同一なる或はより大なる量の取引を行ふために、必要とされる通貨〔の量〕が〔他の諸國と比較して〕非常に少なくてすむ。例へば勞賃に關する範圍だけで言つて見ても、イギリスの工場勞働者は、自分の勞賃〔として得た通貨〕を毎週小賣商人に支拂ひ、その小賣商人はこれを毎週銀行に送り、その銀行はこれを工業家に返し、その工業家は再びこれを自分の勞働者に支拂ひ、かくて更に同じことが繰り返される。この仕組によつて、一人の職工の毎年の勞賃例へば五十二ポンドは、毎週同一の循環をなしてゐる唯だ一個のポンド金貨で支拂ふことができる。イングランドにおいてすら、この機構は、スコットランドにおけるほど完全なものではなく、そうしてまた其の各地方みな同じ程度に完成されてもゐない。だから吾々は、例へば或る農業地方においては、これを工業のみ行つてゐる地方に比較すれば、遙により小量の價值を流通させるために、遙により多量の通貨を必要としつゝあることを、發見するのであ

る。

もし諸君が海峡を越え、貨幣、勞賃はイングランドにおけるよりも遙に低いが、しかもそれが、ドイツ、イタリー、スイス、およびフランスにおいては、遙により多量の通貨によつて流通されてゐることに、氣付くだらう。「これ等の諸國においては」同一の貨幣が、そんなに早く銀行に受入れられないし、また産業資本家の手にも還つて來ない、だから、一個のポンド金貨が毎年五十二ポンドを流通させる代りに、恐らく、二十ポンドだけの年々の勞賃を流通させるため、一ポンド金貨三個が必要とされるであらう。此の如く大陸諸國とイングランドとを比較することによつて吾々の看取し得ることは、低い貨幣勞賃が高い貨幣勞賃よりも、その流通のために遙により多くの通貨を必要とする場合があり得る、といふこと、および之は、吾々の論じてゐる問題に對しては、實際、全く關係のない専門上の問題にすぎない、といふことである。

私の知つてゐる最良の統計に従へば、この國の勞働階級の年所得は、二億五千萬ポンドと見積つて宜しい。この巨大なる金額が凡そ三百萬ポンド「の通貨」によつて流通されてゐる。今、勞賃が五十パーセントだけ騰貴したと假定しやう。さうすると、三百萬ポンドの代りに、四百五十萬ポンドの通貨が必要とされるであらう。「ところが」勞働者の日々の出費の可なりの大部分は、銀貨と銅貨とによつて、即ち金に對するそのものゝ相對的價値が、不換紙幣のそのやうに、法律によつて任意に定めらるゝ只の名目貨幣によつて、支拂はれてゐるから、貨幣勞賃の五十パーセントの騰貴は、「前に述べたやうに、三百萬ポンドの代りに四百五十萬ポンドの通貨を必要とするのだが」、その極端な場合にも、例へば百萬ポンドの額に達する金貨の追加流通を必要とするに止まるであらう。そこでイングランド銀行の、或は私營銀行の地下室に、地金または鑄貨の形で今まで眠つてゐた百萬ポンドが、流通することになる。けれど

も、その百萬ポンドの追加鑄造または追加磨損——流通貨幣の増加の必要から幾らかの新たな磨損が起るものと假定すれば——から生ずる些少な出費をすら、これを省かうと思へば省き得るのであり、また事實省かれるであらう。諸君の皆知らるゝやうに、この國の通貨は二大部門に分たれてゐる。その一つの種類は種々なる額面の銀行券であつて、商人と商人との間の取引および消費者の商人に對する多額の支拂ひに用ひられ、同時に他の種類の通貨、即ち金屬貨幣は、小賣取引に流通してゐる。此等二種の通貨は、別々のものではあるが、その機能は相互に交錯してゐる。例へば多額の支拂ひの場合においてすら、五磅以下の半端な額を支拂ふためには、金貨が、随分の分量に達するまで、流通してゐる。だから、もし明日にも四ポンド券、或は三ポンド券、或は二ポンド券が發行されるとすると、此等の流通徑路を充たしてゐた金貨は直ちにそこから追ひ出され、それらのものが貨幣勞賃の騰貴のために必要とされるであ

らう方面の徑路に流れ込むであらう。かくして、勞賃が五十パーセントだけ騰貴したために更に必要となつた百萬ポンドは、たゞ一個の金貨をも追加せずして供給せらるゝであらう。これと同じ効果は、銀行券一枚をすら増さなくても、随分久しい間ランカシャー州で行はれてゐるやうに、手形の流通額を追加することによつても、生じ得るのである。

勞賃率における一般的騰貴が、例へばウェストン君が農業勞賃において生ずると假定したやうな百パーセントの一般的騰貴が、もし生活必需品の價格における甚しき騰貴を生ずるものとすれば、そうして彼れの考ふる如く、これがためには通貨の追加量が必要とするも之れを得ることが出來ないものとすれば、勞賃の一般的下落もまた、同じ結果を、同じ規模で、反對の方向に生ずべき筈である。よろしい！ 諸君の皆な知らるゝやうに、一八五八年乃至一八六〇年の諸年は紡績業の最も盛な年であつた、そうして殊に一八六〇年はその

點において商業史上比類なきものであり、また同時に他のすべての部門の産業も隆盛を極めてゐた。紡績職工および紡績業に關係するその他すべての労働者の勞賃は、一八六〇年においては、未曾有の高さに上つてゐた。ところへ米國の恐慌がきた、そうして此等すべての勞賃が突然に以前の額の四分の一に下落した。これをもし反對の方向だつたら四百パーセント騰貴したことになるのである。「といふわけは」もし勞賃が五から二十に騰貴すれば、吾々は勞賃が四百パーセント騰貴したといふ、「しかるに」もし二十から五に下落すれば、吾々は勞賃が七十五パーセント下落したといふ、しかし前の場合における騰貴額と、後の場合における下落額とは、同じことであつて、即ち共に一五シリングなのである。さういふわけで、この變動は勞賃率における未曾有なる突然の變動であり、同時にそれは、——吾々がもし常に紡績業に直接従事してゐる職工のみならず、間接にそれに依存してゐる總べての職工をも數へるならば、——

農業労働者數の一倍半以上にも匹敵する數の職工に及んだものである。「さて此の場合に果して」小麦の價格は下落したか？ それは一八五八年から一八六〇年の三年間に一クォーターにつき年平均四十七シリング八ペンスであつたものが、一八六一年から一八六三年の三年間には、一クォーターにつき年平均五十五シリング十ペンスに騰貴した。それでは通貨はどうであつたかと云ふと、一八六〇年には三百三十七萬八千七百九十二ポンドだけ造幣局で鑄造されたに對し、一八六一年には八百六十七萬三千二百三十二ポンドだけ鑄造された。即ち一八六一年には一八六〇年におけるよりも五百二十九萬四千四百四十ポンドだけより多く鑄造されたのである。なるほど、銀行券の流通は、一八六一年には一八六〇年におけるよりも、百三十一萬九千ポンドだけ少かつた。これを差し引かう。それでも尙ほ通貨は、繁榮の年なりし一八六〇年に比較して、一八六一年の方が、三百九十七萬五千四百四十ポンド即ち凡そ四百萬ポンドだけ

多かつた、しかしイングランド銀行における地金準備は、全く同じではないが略ぼそれに近い割合で、同時に減少してゐたのである。

〔更に〕一八六二年と一八四二年とを比較せよ。流通せる諸商品の價值と分量とが莫大な増加をなしたことを除いて考へても、一八六二年には、イングランドおよびウェイルスにおける鐵道の株券や社債や對する正規の拂込のため支拂はれた資本のみで、三億二千萬ポンドになるが、この金額は、一八四二年においては信ぜべからざるものと思はれたであらう。それなのに、一八六二年と一八四二年との通貨の總量は先づ殆んど等しかつた、そうして一般的に言へば、たゞに諸商品の價值のみならず、一般に貨幣取引の價值は、著しき増加を續けてゐるにも拘らず、通貨〔の分量〕の上には漸次的減少の傾向が認められるのである。このことは、我等の友人ウェストンの立場からは、全く解くべからざる一個の謎である。

もし彼にして今少し深くこの問題を考察したな

らば、恐らく彼は、——勞賃の問題は全くこれ程度外におき、これをば一定不變なものと假定しても、——流通せらるべき商品の價值および分量は、また一般的に決濟せらるべき貨幣取引の額は、日々に變動すると云ふことに氣付き、また銀行券の發行額も日々に變動すると云ふこと、また何等貨幣の仲介を俟たず、手形、小切手、帳簿上の信用、手形交換所等の媒介によつて、實現せらるゝ支拂の金額も、日々に變動すると云ふこと、また現實の金屬貨幣が必要とされる限りに對しては、世上に流通する鑄貨と、銀行の準備金とされてゐる又は銀行の地下室で眠つてゐる鑄貨および地金との比例も、日々に變動するものと云ふこと、また國內の流通のため吸收される地金の分量と、國際間の流通のため國外に送り出される地金の分量とも、日々に變動するものと云ふことに、氣付いたであらう。かくて彼は、通貨〔の分量〕が固定してゐるといふ彼れの獨斷は、言語道斷の誤謬であつて、吾々の日常見る變動と相容れ

ざること、気がついたであらう。彼は、通貨の法則に關する彼の誤解を轉じて勞賃の値上げに反對する議論となすことの代りに、かく絶えず變

四、需要供給の法則¹⁾

〔註一〕 標題は、イギリス本には『供給と需要』となし、ドイツの譯本には『勞賃の尺度について』となす。

我等の友人ウェストンは、ラテン語の *repetitio est mater studiorum* 即ち反覆は研究の母といふ諺を奉じてゐる。そうして其のために彼は、彼の最初の獨斷を重ねて新たな形式のもとに繰り返し、勞賃増加のために生ずる通貨の縮少は資本の減少を齎すであらう云々と論じた。「しかし」通貨に關する彼の奇妙な考は私の既に批評したところだから、私は、彼が彼の想像的な通貨上の難關に伴ふと彼の考へてゐる想像上の結果にまで、茲で立ち入る必要は全くあるまいと思

化しつゝある諸事情に對し通貨をして適應せしむるための法則を研究したであらう。

ふ。「だから」私は進んで、かくも様々な形式で繰り返されてゐる彼の全く同一な獨斷を、直ちにその最も單純な理論的形式に還元するであらう。

彼がこの問題を取扱つた方法の無批判的なことは、一言で明かとなるであらう。彼は勞賃の値上げに對して、或は斯の如き値上げの結果たる高い勞賃に對して、抗論してゐる。さて、私は彼に問はう、高い勞賃とは何であり、低い勞賃とは何であるか？ 何故例へば毎週五シリングでは低い勞賃となり、毎週二十シリングでは高い勞賃となるのか？ もし五シリングが二十シリングに較べて低いのなら、二十シリングは二百シリングに較ぶれば、なほさら低い。もし何人かが寒暖計につい

て講義をする場合に、いきなり度が高いとか低いとか云ふことを辯じ立てたならば、彼は全く何等の知識をも與へることが出来ないであらう。彼は先づ吾々に向つて、氷點は如何にして見出されるか、また沸騰點は如何にして見出されるかを述べ、かくて、如何にして此等の標準點が、寒暖計の賣手や製造人やの嗜好によつてではなく、種々の自然法則によつて決定せらるゝものなるか、を述べねばならぬ。ところで勞賃および利潤に關して、ウェストン君は、ただに此の如き標準點を経済法則から演繹し得なかつたのみならず、それを考究する必要をすら感じなかつたのである。彼は、高い低いといふ普通の俗語を何か一定した意味を有するものとして受け入れ、それで満足してゐるのだが、しかし言ふまでもなく、勞賃は、その大きさを測定するための或る標準と比較して、始めて高いとか低いとか云ひ得られるに過ぎぬのである。

彼は、何故或る一定量の貨幣が或る一定量の勞

働に對して與へらるゝかを、説明することが出来ないであらう。もし彼が『それは需要供給の法則によつて決定される』と答へるやうなことがあれば、私は直ぐさま彼に向つて「それなら」需要供給それ自身は如何なる法則によつて規定されるかと質すであらう。さうすると、件の答は直ちに其の力を失ふであらう。「勿論」労働の需要と供給との關係は絶えず變動してゐる、そうしてその變動に伴つて労働の市場價格もまた絶えず變動してゐる。もし需要が供給を超せば勞賃は騰貴する、もし供給が需要を超せば勞賃は下落する、(尤も斯様な事情のもとでは、例へば同盟罷業なり又はその他の方法によつて、需要供給の眞の状態を驗めし、見る必要があるかも知れないが)。しかしもし諸君が需要供給をば勞賃決定の法則として認めるならば、躍氣となつて勞賃の騰貴に反對するのは、無用でもあり兒戯に類するものでもあらう。何故ならば、諸君の援用するその最高法則「需要供給の法則」に従へば、勞賃の一時的騰貴は、そ

の一時的下落と同じやうに、全く必然的であり且つ當然なものであるから。「ところで」もし諸君が需要供給を勞賃決定の法則として認めないならば、私は再び件の質問を繰り返さう、何故或る一定量の貨幣が或る一定量の勞働に對して與へらるゝのであるか？

〔註二〕『需要供給の關係は市場價格を説明しない、むしろ逆に、市場價格が需要と供給との變動を説明するのである』。(資本論、ドイツ本、第三卷の一、一七一頁。なほ同書の一六五頁以下を参照せよ。)

だが私はこの問題「需要供給の問題」を更により廣い見地から考究して見やう、もしも諸君が、勞働の、或はその他あらゆる商品の價值が、需要供給によつて終局的に決定せられる、と考へるならば、諸君は全く誤謬に陥るであらう。需要供給は市場價格の一時の動搖を規定するに過ぎない。それは諸君に向つて、何故ある商品の市場價格がその價值以上に上ぼり、或はそれ以下に下がるかを

説明するであらうが、しかしその價值それ自身を明かにすることはできない。需要と供給とが平衡を保つ場合、または經濟學者の云ふやうに需要と供給とが一致する場合を想像せよ。かゝる場合には、此等反對の力が相等しくなつたその瞬間に、此等は相互に相手を無力ならしめて、一方の方向にも他方の方向にも働くことを止めてしまふ。需要と供給とが相互に平衡を保ち、従つてまた其の作用を中止したその瞬間に、商品の市場價格はその眞實の價值と、即ちその市場價格が之を中心として振動するところの標準價格と、一致するのである。だから、その價值なるものの性質を研究するに當つては、吾々は、需要および供給の市場價格に及ぼす一時的影響には、何等の用をも有たぬのである。このことは、勞賃についても、また總べての他の商品についても、同じことである。

〔註三〕正しくは勞働力とすべきである。
——本書第七節(四四頁以下)および第九節の冒頭(五一頁以下)参照。

〔註四〕『需要と供給とが平均するならば、それらは作用を中止する、さうして正にそ

れゆへに商品はその市場價值で賣られるであらう。』資本論、同上、一六九頁。

五、勞賃と物價¹⁾

〔註一〕ドイツ譯には『勞賃および商品の價格』と題す。

我等の友人「ウエストンを指す」の議論は、これを最も單純なる理論的表現に還元すると、すべて次のやうな單一の獨斷となる、『商品の價格は勞賃により決定され或は規制される。』

この舊式な陳腐な謬論に對しその反證を擧げるために、私は實際的觀察に訴へやう。私の諸君に告げ得ることは、その勞働の比較的に高價な〔即ち勞賃の比較的に高い〕イギリスの工場勞働者や、鑛夫や、造船工や、その他の者は、彼等の生産物の廉價な點では、却て他のすべての國民に優つてゐるが、それと同時に、例へばイギリスの農業勞働者のやうに、その勞働の比較的に廉價なもの

は、彼等の生産物の高價な點で、競争上殆ど他のすべての國民に負けてゐる、といふことである。同一國內の物品と物品とを、さうしてまた異なる國々の諸商品を、互に較べて見れば解るやうに、數個の例外——眞實のといふよりは寧ろ外見上の例外——を除けば、平均して、高價な勞働は廉價な商品を、廉價な勞働は高價な商品を生産する。勿論これは、前の場合における勞働の高價と後の場合におけるその廉價とが、それ／＼此等正反對の結果の原因であるといふことの證明にはなるまいが、しかし兎に角、諸商品の價格が勞働の價格によつて支配されてはゐないといふことの證明にはならう。だが、吾々にとつては、この經驗的方法を用ひるのは、全く餘分なことである。

ウェストン君が、「商品の価格は労賃によつて決定され或は規制される」といふ獨斷論を立てたといふことは、恐らく、否定され得やう。事實の點では、彼は決して之を公式化してゐるのではない。それどころか、彼は、利潤および地代もまた商品の價格の構成部分を成す、何故なら、ただに労働者の勞賃のみならず、資本家の利潤も、地主の地代も、商品の價格の中から支拂はれねばならぬから、と言つてゐる。しかし「それなら更に問ふことがあるが」、彼れの考では、價格は如何にして形式されると云ふのか？「曰く、彼れの考によれば、それは」先づ第一に勞賃によつて。それから此の價格の上に、資本家のために或る追加歩合が加へられ、更に他の追加歩合が地主のために加へられる。「例へば」或る商品の生産に使用せらるゝ労働の勞賃を十と假定しやう。もし利潤率が、放下された勞賃額に對して百パーセントであるとすれば、資本家は十を加へるであらう、そうして地代の率もまた勞賃に對して百パーセントで

あるとすれば、更に十が加へられるであらう、かくて其の商品の價格は三十になるであらう。しかし斯様にして價格を決定することは、單に勞賃のみによつて之を決定すると同じである。もしも上の例において勞賃が二十に騰貴したならば、その商品の價格は六十に騰貴する、かくてその他の場合もすべて之に準ずるであらう。だから、勞賃が價格を規制するといふ獨斷論を唱へるところの、すべての老朽せる經濟學上の論者たちは、利潤および地代をば勞賃に對する單なる追加歩合として取り扱ふことによつて、この獨斷論を證明せんと試みた。勿論彼等の中の何人も、これら歩合の限度を、何等かの經濟法則に歸し得たものはない。「何故これらの歩合が五十パーセントとか百パーセントとかに定まるかを、一定の經濟法則によつて説明し得たものは、一人もなかつた。」、それどころか、彼等は、利潤は、因襲や、慣習や、資本家の意志やにより、或は何か同じやうな勝手な且つ説明すべからざる他の方法によつて、決定

されるものと考へたやうである。假りに彼等が利潤は資本家だちの間の競争によつて決着すると主張するとしても、それは全く説明にはならない。なるほど、その競争は、種々な事業における種々な利潤率を平均し、其等の利潤率を一つの平均水準に歸一せしむるに相違ないが、しかしそれは、決して水準それ自身を、即ち一般利潤率を、決定し得るものではない。

〔註二〕 一般利潤率の水準そのものが如何にして決定せらるゝかを説明し得ざること、同時に利潤率下落の傾向を説明し得ざることである。マルクスは資本論において自らこの法則を説明した後、次の如く述べてゐる。『以上述ぶるところによつて見れば、この法則（利潤率下落の傾向的法則）は如何にも簡單に見えるが、しかし之を發見することは、從來の全經濟學の成し得なかつたところである。彼等はこの現象を見つた、さうして其れを説明するために、矛盾

せる企圖において苦悶した。しかも此の法則は、資本家的生産にとり極めて重要なものであり、従つて吾等は、これを以て、アダム・スミス以後の全經濟學がその解決に主力を注ぎたるところの、かの神秘を形成するものだ、と言ひ得るのであり、またアダム・スミス以後の種々なる學派の間における差異は、これが解決に關する種々なる試みに存す、と言ひ得るのである。しかし他方において、吾々が次の事柄を考慮するならば、——即ち從來の經濟學は不變資本および可變資本の區別について模索したには相違ないが、しかし明確には決して之を言ひ現はすに至り得なかつたこと、また彼等は嘗て剩餘價值を利潤から引き離して説明するに至らず、且つ一般に利潤をば、その相互に獨立せる種々なる成分（産業利潤、商業利潤、利子、地代）と區別して、純粹にこれを説明するに至らなかつたこと、更

にまた、彼等は曾て根本的に資本の有機的構成における差異を分析せず、従つて一般的利潤率の構成についても之を根本的に分析するに至らなかつたこと、——凡そ此等の事柄を考慮するならば、従來の經濟學が件の謎の解決に到達し得ざりしことは、敢て怪むを要せぬわけである。』(資本論第三卷の一、一〇三、一〇四頁)

商品の價格が勞賃によつて決定されるといふことは、窮極如何なる意味に歸するか？ 勞賃とは勞働の價格に附した名稱に過ぎないから、それは、商品の價格は勞働の價格によつて規制されるといふ意味になる。『價格』とは交換價值であり、——私が價值といふのは、いつも交換價值のことである——貨幣で言ひ表はされた交換價值であるから、件の命題は畢竟かういふことになる、『商品の價值は勞働の價值によつて決定される』、或は、『勞働の價值は價值の一般的尺度である。』

〔註三〕 この場所およびその後に見る

『勞働の價格』または『勞働の價值』は、何れも『勞働力』の價格または價值とすべきである。——本書第七節冒頭(四四頁以下)および第九節(五一頁以下)参照。

〔註四〕 資本論第一版第四頁の脚註第九には『今後吾々が「價值」なる語を何等の規定なしに用うる時は、それはいつでも交換價值のことである』としてある。しかし第二版に至つては、交換價值は價值の現象形態であるとされてゐる。なほこの價值および交換價值なる術語については、Emmet, The Marxian Economic Handbook の附録参照。(赤松五百磨氏の譯文『マルクス説における價值および交換價值なる術語について』は、『我等』第八卷第二號——大正十五年二月發行——に載す。)

しかし、さうだとすると、『勞働の價值』それ自身は如何にして決定せられるか？ こゝで我々は確と行き詰つてしまふ。勿論、それは我々が論理

的推理をしやうとするから行き詰るのである。しかしこの説の主張者は、論理上の躊躇をなすことなく、之を手輕に片づけてゐる。例へば、我等の友人ウエストンの場合を取つて見よ。先づ彼は吾々に説くに、勞賃は商品の價格を規制すると云ふこと、従つて勞賃が騰貴すれば物價も騰貴しなければならぬと云ふこと、を以てする。それから次に彼は向き直つて、勞賃の値上げをしても何の役にも立たない、何故なら、『勞賃が値上げされた以上』諸商品の價格は已に騰貴してゐるし、さうして勞賃〔の高低〕は、實に、その勞賃を支出して購買し來たるべき諸商品の價格によつて測定されるものだから、と説く。かくて吾々は、勞働の價值は商品の價值を決定するといふことから出發して、商品の價值は勞働の價值を決定するといふことに到達する。斯様にして吾々は、最も誤れる循環論の中に行つたり來たりして、結局何等の結論にも到達しないのである。

要するに全體から見て明瞭なことは、一つの商

品の價值、例へば勞働なり、穀物なり、その他何等かの商品の價值を、價值の一般的な尺度および規制者としたのでは、吾々は一つの價值を他の價值——其れはまた其れとして決定さるゝことを必要とするもの——で決定するのだから、畢竟吾々は、單に難關の所在を移したに過ぎぬと云ふことである。

『勞賃は商品の價格を決定する』といふ獨斷は、これを最も抽象的の形で言ひ表はせば、『價值は價值によつて決定される』といふことに歸する、さうして此の同義反覆は、實に、吾々が價值に關して全然何んにも知らないことと云ふことを意味する。もしこの前提を認めるならば、經濟學の一般的諸法則に關する總べての推理は、單なる無駄話となつてしまふ。それゆへ、リカアドが一八一七年に公にした彼れの『經濟學原理』において、『勞賃は價格を決定する』といふ此の古い、通俗な、使ひふるされた謬見を、——アダム・スミスおよびフランスにおける彼れの先行者たちは、彼等の研究の

眞に科學的なる部分においてこそ之を排斥してゐるが、しかしより、通俗的な俗學的な諸章においては、再び之を持ち出してゐるところの、その謬見

を、——根本的に打破して仕まつたのは、彼れの偉大なる功績である。

六、價值(および價格)と勞働¹⁾

〔註一〕 イギリス本は『價值と勞働』となし、ドイツ本は『價值と價格について』となす。

諸君、私は今、この問題の眞實の展開に入らねばならぬと云ふ點に達した。「だが」私は十分満足のできるやうに之を仕遂げると約束することはできぬ、何故といふに、さう仕やうがためには、私は經濟學の全局面に亘ることを餘儀なくされるであらうから。私はただ、フランス人が言ふやうに、effleurer la question 即ち主要點に觸れ得るだけだ。

吾々の提出すべき最初の問題は、商品の價值と何か? 如何にして其れが決定せられるか? である。

一見すると、一つの商品の價值は全然相對的のものであつて、一つの商品をば其のものが總べて他の商品に對して有する關係において考へなければ、決定することの出來ぬもののやうに見えるだらう。實際において、吾々が一つの商品の價值、その交換價值といふ時には、吾々はその物が總べて他の商品と交換せらるゝところの比例的分量 (proportional quantity) を意味する。しかし、さうだとすると、こゝにいふ問題が起る、商品が相互に交換せらるゝところの其の比例は、如何にして規制せられるか?

吾々は經驗からして、これらの比例は限りなく變動することを知つてゐる。假りに或る一個の商

品、例へば小麥を取つて見るのに、吾々は一クォーターの小麥が種々なる商品と殆ど無數の違つた比例において交換されることを發見する。しかし、たとひ絹布や金やその他の如何なる商品で表現されやうとも、その價值は依然としていつも同じであるから、それは種々なる物品に對するこれら種々なる交換率より何か別のもので、それから獨立したものでなくてはならぬ。種々なる商品に對するこれら種々なる方程式を、一つの甚だしく違つた形態で表現することが、可能でなければならぬ。

〔註二〕 前記の及び之に續く以下の章句は、吾々をして資本論第一卷第一章の初めの部分に横はる商品價值論を聯想せしむる。その部分は、第一版と第二版との間には少からぬ相違があるが、茲には第一版から、前記の章句に該當する部分を引用しておく。讀者は更にこれを現行の流布本と比較することにより、マルクスが同じ問題を如何に

度々異つた言葉を以て説明してゐるかを、知り得らるゝであらう。前記の章句に該當する資本論第一版の文句は次の如くである。

『個々の商品、例へば一クォーターの小麥は、極度に種々なる比例において、他の貨物と交換される。けれども、その交換價值は、x 量の靴墨、y 量の絹、z 量の金、等に表現されやうとも、依然として不變である。従つてそれは、これらのその種々なる表現方法から區別し得られなければならぬ』。

しかのみならず、もし私が、少麥一クォーターは一定の比例において鐵と交換されるとか、または小麥一クォーターの價值は鐵の一定量において表現されるとか言つたならば、それは私が、小麥の價值と鐵における其の等價とは、小麥にも鐵にもあらざる或る第三者に等しいと言つたわけになる。何故なれば、私は「爾か言ふことにおいて」、

これらのものが二つの違つた形において同じ大きさのものを表現すると假定してゐるから。だから此等の各々は、小麦にせよ鐵にせよ、他方のものからは獨立して、彼等の共通の尺度であるところの此の第三者に還元されなければならぬ。

〔註三〕 資本論第一版——『吾々は更に二つの商品、例へば小麦と鐵とを探らう。これらの交換關係は如何やうであらうとも、それは、與へられたる量の小麥が或る量の鐵と等位に置かるゝ方程式、例へば $1x = y$ となつて、常に代表せられる。この方程式は何を意味するか？ 同一の價值が二つの異なる物のうちに、即ち一クォーターの小麥のうちと、aセントネルの鐵のうちとに、存在するといふことを意味する。だから兩者は、それ自體、一方のもつても他方のものでもないところの、或る第三者に等しい。故に兩者の各々は、それが交換價值である限

り、他方のものから獨立に、この第三者に還元し得られなければならない。』

私はこの點を説明するために、極く簡單な幾何學上の例について考へて見やう。あらゆる總べての形態および大きさを有する三角形の面積を比較し、または三角形をば長方形或はその他のどんな直線形とでも比較するといふ場合に、吾々は何う處置するか？ 吾々は、どんな三角形であつても其の面積をば、その外見的形態とは全く違つた或る表現に約元する。吾々は三角形の性質からして、これが面積はその底邊と高さとの積の半分に等しいことを發見し、かくて吾々は、すべての種類の三角形の種々なる價值を比較し得るのみならず、また有らゆる總べての長方形の種々なる價值をも比較し得る、何故といふに、これらの長方形は何れも一定の數の三角形に分解し得らるゝものだから。

諸商品の價值についても同じ仕方が行はれねばならぬ。吾々はそれらの總べてをば總べてに共通品物を生産するばかりでなく、彼れの勞働そのものが社會によりて費された勞働總額の一部を成し一分を成してゐなければならぬ。それは社會内における分業に従屬しなければならぬ。それは他の分業がなければ始めから成り立たぬものであり、また自分の方からは他の分業を補充して行かなければならぬものである。

吾々が商品を價值として考へる場合には、吾々は此等のものをば専ら、實現された、固定された、或は言はゞ、結晶された社會的勞働といふ單一の觀點のもとにおいてのみ觀察する。この觀點からすれば、これらの商品はただ勞働の多いまたは少い分量を代表してゐると云ふことだけで區別され得るので、例へば、絹のハンケチには煉化石により多くの分量の勞働が費されてあると云ふの類である。それなら何うして勞働の分量を測るのか？ それは勞働の續く時間によつて、即ち勞働を、時、日、等で測るのである。勿論、この尺度をあてはめるについては、すべての種類の勞働

な或る表現に還元することができ、さうして只だ、これらのものが此の同一の尺度を包含する比例によつてのみ、これらのものを分別することが出来るのでなければならぬ。

諸商品の交換價值はただ此等のもの〔諸商品〕の社會的機能であり、これが自然的性質とは全然何等の關係を有たぬのであるから、吾々は先づ、何が總べての商品の共通な社會的實體であるか？ といふことを尋ねなければならぬ。それは勞働である。一つの商品を生産するためには、一定量の勞働がその上加へられ、または、それに費されねばならぬ。なほ注意しておくが、それはただ勞働ではなくて、社會的勞働だ。彼れ自身の直接の使用のために、即ち自分自身がそれを消費するために、或る品物を生産する人は、一個の生産物を作り出すだけで、一個の商品を作り出すのではない。一個自給の生産者として彼は社會と全く没交渉である。しかるに、商品を生産すると云ふことになれば、人はただに或る社會的の欲望を満たす

は、その単位たるべき平均労働または單純労働に還元されるのである。

そこで吾々は、かういふ結論に達する。一つの商品が或る價值を有するのは、それが社會的労働の結晶であるからだ。その價值の大き、即ちその相對的價值は、その中に含まれてゐる斯かる社會的實體の分量の大小に、言ひ換ふれば、その生産に必要な労働の相對的の高に、依存するものだ。だから、諸商品の相對的價值は、それらの商品に費され、實現され、固定された労働のそれ／＼の量または高によつて決定される。同一の労働時間を以て生産され得るところの諸商品のそれ／＼の分量は、「價值において」相等しい。或はまた、一の商品の價值が他の商品の價值に對する關係は、前者に固定された労働の分量が後者に固定された労働の分量に對する關係である。

思ふに諸君の多數は質問せらるゝだらう、しかしらば、商品の價值を勞賃「その商品を生産するために費された労働に對する報酬」によつて決定す

ると、これが生産に必要な労働の相對的分量によつて決定するのと、その間に果して、さまで大なる、または概して何等かの、差異が存するのであるかと。ところが諸君の注意を請はなければならぬのは、労働に對する報酬と、労働の分量とは、全く別物だと云ふことである。例へば、一クオータアの小麦と一オンスの金とに同量の労働が固定されてゐると假定する。私がこの例を取るのには、それが一七二一年に公にされたベンジャミン・フランクリンの最初の論文に用ひられてあるからだ。その著述は *A Modest Enquiry into the Nature and Necessity of a Paper Currency* (紙幣の性質および必要に關する一小研究) と題するもので、書中彼は、先鞭をつけた者の一人として、價值の眞性質に觸れてゐるのである。さて、吾々は、一クオータアの小麦と一オンスの金とは、それらの物にそれ／＼固定されてゐる何日分か何週分かの、平均労働の同じ分量の結晶であるがために、これらの物は同一の價值または等價物

であると假定する。かやうにして金と穀物との相對價值を決定するに際して、吾々は農業労働者および鑛夫の勞賃につき幾分でも何等か顧みる所があるかと云ふに、それは毫もない。吾々は、如何に彼等の一日分または一週間分の労働が支拂はれるかと云ふこと、または總じて賃労働が使用されたか何うかと云ふことさへ、全く不問に附する。もし賃労働が使用されたにしても、勞賃は甚しく不同であつたかも知れない。その労働を小麦一クオータアに實現した労働者は、僅に二ブッシェル(二クオータアは八ブッシェルに當る)を得てゐるに、鑛山に使用された労働者は、金一オンスの半分を得てゐることもあり得る。或はまた、彼等の勞賃は同じことだとしても、彼等の生産した商品の價值からは、様々の有らゆる比例において背離し得る。それは穀物、クオータアまたは金一オンスの二分の一、三分の一、四分の一、五分の一、またはその他の如何なる分數でもあり得る。勿論、彼等の勞賃が、彼等の生産した商品の價值を

超過し、それより多くなるといふことはあり得ぬが、しかし有らゆる可能な程度において其れより少くはあり得る。彼等の勞賃は生産物の價值によつて制限されるが、しかし彼等の生産物の價值は勞賃によつて制限されはしないであらう。何はさておき、要するに、價值、例へば穀物と金との相對的價值なるものは、使用せらるゝ労働の價值には、即ち勞賃には、總じて何等の關係なくして決定せられるであらう。だから、諸商品の價值をそれらのものに固定された労働の相對的の分量で決定するといふことは、諸商品の價值を労働の價值即ち勞賃で決定するといふ同義反覆の説明法とは、全然別種の事柄である。しかしこの點は、吾々の研究が進むに従つて、なほ委しく闡明せらるゝであらう。

〔註四〕 私の用ひた底本(例言参照)には一七二九年としてあるが、それは恐らく誤植だらうと思ふ。『經濟學批判』には一七二一年としてある。Zur Kritik der politischen

Oekonomie, S. 38 参照

〔註五〕 第五節『勞賃と物價』の終りの部分
(三一頁) 参照。

商品の交換價値を計算するに當つては、吾々は最後に用ひられた勞働の分量に加ふるに、商品の原料の上に以前費された勞働の分量と、かゝる勞働を助くるための器具、道具、機械、および建物に賦與された勞働と、を以てしなければならぬ。例へば綿絲の一定量の價値は、紡績の過程中に棉花に加へられた勞働の分量、棉花そのものゝ上に以前實現された勞働の分量、石炭や油やその他の使用せらるゝ助成材料に實現された勞働の分量、蒸氣機關や紡錘や工場用建物やその他のものに固定された勞働の分量、等、等の結晶である。固有の意味における生産用具、例へば道具や機械や建物は、或は長き或は短き期間に亘り、繰り返さるゝ〔何回もの〕生産過程を通じて、何遍でも使用せられる。もし此等のものが原料のやうに直ちに消耗せられるならば、その全價値は、これらの

ものが其の生産を助けた諸商品の上に、一度に移轉さるゝであらう。けれども、例へば紡錘の如きは、段々にしか消耗しないものだから、その持續する平均時間と、一定の期間例へば一日の間における其の平均の消耗または磨損とを基礎として、平均の計算が立てられる。かやうにして吾々は、紡錘の價値のうち何れだけが日毎に紡がれる絲に移轉し、從つてまた、例へば一ポンドの絲に實現される勞働の總量の中で、どれだけが、以前紡績に實現されてゐた勞働の分量に歸するかを、計算することが出来る。吾々の現在の目的に對しては、この點に關し、もはやこれ以上縷説する必要はない。

〔註六〕 Instruments of production の譯。

この英語は狹義に解すれば、勞働手段だけになるが、これを廣義に用ふれば、原料、助成材料等をもそのうちに含む。

商品の價値がもしその生産のために賦與された勞働の分量で決定されると云ふことであれば、人

が怠惰であればあるだけ、また人が不器用であればあるだけ、その商品を仕上げるに餘計の勞働時間を要するから、その者の商品は一層價値あるものゝ如く考へられるかも知れない。だが、さう考へたら大變な間違にならう。諸君は私が『社會的勞働』といふ語を使つたことを記憶せらるゝだらう、さうして『社會的』といふこの形容詞のうちには多くの要點が含まれてある。商品の價値はそれに費された又はそれに結晶された勞働の分量によつて決定されるといふ時、吾々は、與へられたる社會狀態において、一定の社會的平均の生産條件のもとにおいて、使用せらるゝ勞働の與へられたる社會的平均の集約度インテンシティと熟練とを以てする場合に、その生産に必要な勞働の分量を意味する。イギリスにおいて機械機が手織機と競争するやうになつてからは、一定量の絲を一ヤードの綿布にするのに、以前の勞働の半分しか要らなくなつた。そこで憐れなる手織機業者は、以前は一日に九時間乃至十時間しか働いてゐなかつたのに、今は一

日に十七時間乃至十八時間働くやうになつた。けれども二十時間分の彼れの勞働の生産物は、今では社會的勞働の僅に十時間分を、言ひ換ふれば、一定量の絲を織物にするため社會的に必要な勞働の十時間分を、代表するに過ぎない。だから、二十時間に亘る彼れの生産物は、以前彼が十時間かけて仕上げた生産物の價値しなくなつた。

さて諸商品に實現されたところの社會的に必要な勞働の分量が、それら商品の交換價値を規制すると云ふことであれば、一つの商品の生産に要せらるゝ勞働の分量が増す毎に、その價値は高まり、減する毎に、その價値は低くなる筈である。

もし種々の商品の生産に必要とせらるゝそれらの勞働量がいつも不變であるならば、これらの物の相對價値もまた不變であるであらう。だが實際には斯様なことは起らぬ。一商品の生産に必要な勞働の分量は、使用せらるゝ勞働の生産力における變化と共に、絶えず變化する。勞働の生産力が大であればあるだけ、勞働の一定時間内によ

り多くの生産物が仕上げられ、労働の生産力が小であればあるだけ、同じ時間内により僅かの生産物が仕上げられる。例へば、人口の増加に伴うて瘦せた土地を耕作することが必要になつて来たならば、同じ高の生産物が、より多くの労働量を費してでなければ得られなくなり、従つて農産物の価値は騰貴するだらう。これに反し、近代の生産手段を以て、もし一人の紡手が一日の労働日の内に、手紡車で同じ時間内に紡ぎ得たであらうところの棉花量の数千倍を糸にして仕まふならば、棉花の各一ポンドづゝは、以前に比べて、絲紡ぎの労働の数千分の一しか吸収しないことが明かだ。さうしてその結果、紡績作業によりて棉花の各一ポンド毎に加へらるゝ価値は、以前に比べて数千分の一にしか足らぬであらう。絲の価値もこれに應じて下落するであらう。

しばらく種々なる人々の先天的の精力および後天的の労働能力の差異を無視するならば、労働の生産力は主として次の事情に依存する筈だ。

第一。労働の自然的條件に、例へば、土地や鑛山やの豊饒度、およびその他。

第二。社會的労働力の進みゆく改善に、例へば、大規模の生産、資本の集積および労働の結合、工場内の分業、機械、改良されたる諸方法、化學的およびその他の自然的作因の應用、通信運搬の諸機關による時および所の縮少、ならびに科學の力により自然力を驅つて労働の用をなさしめ、また之によつて労働の社會的或は協力的性質を發達せしむるところの、その他の一切の設備、凡そ此等のものから得らるゝところの社會的労働力の改善。労働の生産力が大なれば大なるほど、より僅かな労働が生産物の一定量に費され、従つて生産物の価値は小さくなる。労働の生産力が小なれば小なるほど、より多くの労働が生産物の同じ分量に費され、従つてその価値は大きくなる。だから、吾々は一般的法則として、次のことを定立し得る、――

〔註七〕 subdivision of labour

諸商品の価値は、これが生産に使用せられた労働時間に正比例し、また使用せられた労働の生産力に逆比例する。

私はこれまで価値のこのみ述べて来たが、更に價格について數言を加へねばならぬ、これは價值の取る一の特種形態なのだ。

價格は、それ自身を取つて見れば、ただ價值の貨幣的表現たるに過ぎない。例へば、この國「イギリス」における總べての商品の価値は金價格で表現されてゐるが、大陸では主として銀價格で表現されてゐる。金または銀の価値は、すべての他の諸商品のそれと同じく、これを得るために必要な労働の分量によつて規制せられる。吾々は吾々の國民労働の一定量が結晶されてゐるところの、吾々の國民生産物の一定量を、金銀産出國の生産物——それには彼等の労働の一定量が結晶されてゐる——と交換する。此の如き方法により、即ち事實は物々交換により、吾々は、すべての商品の價值、即ち其等のものに費された労働のそれ

の分量を、金および銀で現すやうになる。吾々がこの價值の貨幣的表現、言ひ換ふれば、價值の價格への轉化について、もつと精確にこれを考察するならば、それは吾々が、すべての諸商品の價值に一の獨立せる且つ同質なる形態を賦與するための、或は等一なる社會的労働の或る分量として之を表現するための、一過程だといふことを發見するだらう。價格は、それが價值の貨幣的表現に過ぎざる限りにおいては、アダム・スミスによつて natural price (自然價格) と呼ばれ、フランスのフィジオクラツツ (重農學者) によつて prix nécessaire (必要價格) と呼ばれた。

〔註八〕 當時ではイギリスだけが金本位制を採つてゐたのだ。

しからば、價值と市場價格との關係、または自然價格と市場價格との關係は何うであるか？ 諸君の知らるゝ如く、商品の生産條件は個々の生産者にとつて如何に相違してゐやうとも、市場價格は同じ種類のすべての商品に向つて皆な一樣であ

る。市場価格は、生産の平均条件のもとにおいて、一定の貨物の一定量を市場に供給するために、必要とせらるゝ社會的勞働の平均量を表現するに過ぎない。それは、一定の種類の商品の全體によつて計算せられる。

然るかぎりにおいて一の商品の市場価格はその價值と一致する。他方において、市場価格の震動——それは今まで價值または自然價格の上に上ぼつてゐたかと思へば、今はまたそれ以下に下がる——は、需要および供給の動搖に依存する。「だから」市場價格の價值からの背離は繼續的である、けれどもアダム・スミスの言ふやうに、「自然價格は諸商品の價格が絶えずそれに引かれてゐるところの中心價格だ。種々なる偶發事は、時として市場價格を自然價格の遙か上に留まらしめ、時としては幾分それ以下にさへ推し下げる。しかし如何様の障りがあつて市場價格を休息および滯留の此の中心に安定することから妨げやうとも、市場價格は絶えずこれに向つて傾向しつゝある。」

私は今この點を委しく述べることはできぬ。ただ、もし需要と供給とが相互に平衡するならば、諸商品の市場價格は、これが生産のため要せらるゝ勞働のそれぞれの分量によつて決定せられるところの、それらのものゝ自然價格、即ちそれらのものゝ價值と一致するであらう、といふことを言へば足りる。ところが需要と供給とは絶えず互に平衡する傾向を有たねばならぬものだ、尤もそれは一の動搖は他の動搖により、即ち騰貴は下落により「價格が騰貴し過ぎて供給が需要に超過すれば、次ぎには價格が下落すると云ふことにより——河上」、また下落は騰貴によつて「價格が下落し過ぎて需要が供給に超過すれば、次ぎには價格が騰貴すると云ふことによつて——河上」填補されることによるの外はないのだが。もしも諸君が、單に日々の動搖を観察する代りに、例へばトウク氏がその著 *History of Prices* (物價史) でしたやうに、長期に亘つて市場價格の動きを研究したならば、市場價格の波動、その價值からの背

離は、一上一下、互に相殺し填補するものであり、従つて、私が今立ち入ることの出来ない獨占やその他の或るモディファイケーションの影響、「資本に對する利潤率の平均のために起る市場價格の價值からの背離等を指す——河上」を除外するならば、すべての種類の商品は、平均して、それ／＼の價值または自然價格を以て賣られるものだ、といふことを發見するであらう。市場價格の動搖が相互に填補するに至る平均期間は、商品の種類を異にするによつて異なる、それは或る種類の商品にあつては他の商品におけるよりも、供給を需要に適合することが一層容易であるからだ。

さて、廣く觀察し且つ稍々長き期間を包含すれば、すべての種類の商品はそれ／＼の價值において賣られるのであるが、もしさうだとすれば、かの利潤なるものが、——それは個々の場合の利潤でなく、種々なる事業の恒常的な且つ普通の利潤が、——諸商品の價格から、即ち諸商品とその價值以上の價格で賣ることから、發生するものだ

考へるのは、ノンセンスである。この考の無稽なことは、これを一般化して見ると明かだ。或人が賣手として絶えず得てゐるものは、買手として絶えず損してゐなければならぬ。「賣る時には價值以上の價格で賣るから得をするだらうが、物を賣るばかりで何も買はないと云ふわけには行かぬから、一方で物を賣ると同時に、他方では物を買ふのだが、既に物を買ふとなれば、やはり價值以上の價格で買ふのだから、賣つた時に儲けた利得は、買ふ時に皆な無くして仕まひ、前後差引き何等の餘分も残らぬわけだ——河上」。「それかと言つて」、賣手になることのない買手、生産者になることのない消費者がある、と言つたところが、それは駄目だ。これらの人々が生産者に支拂ふところのものは、彼等が最初生産者から無償で得來つたものでなければならぬ。「しかるに」もし誰かが先づ吾々の金を取り上げておいて、さうして後から其の金で吾々の商品を買ふのなら、吾々は其の人に吾々の商品をいくら高く賣つたとて、それ

で金儲ができる筈はない。かやうな種類の取引は損失を軽減することは出来ても、決して利潤を實現する助けにはならぬ筈だ。

だから利潤の一般的性質を説明するに當つては、吾々は、かういふ理論——即ち商品は平均して言へばその眞實の價值において賣られるものであり、さうして利潤はこれらの商品をその價值において、言ひ換ふれば、これに實現された労働の分量に比例して、賣ることにより獲得せらるゝものだ、といふ理論——から出發しなければなら

七、労働力

さて吾々は、このやうな早急な方法でなし得る限りにおいて、既に價值の性質、あらゆる種類の商品の價值の性質を研究したからして、吾々はこれから吾々の注意を、労働の價值といふ特殊の價值に向けなければならぬ。さうして茲でもまた私は一見バラドックスに似たことを言つて、諸

君。もし吾々が此の前提のもとに利潤を説明することが出来なければ、吾々は一般にこれを説明することが出来ぬのだ。これはバラドックスであり、日常の觀察に反してゐるやうに見える。しかし地球が太陽の周りを廻つてゐると云ふのも、また水が最も燃え易い二種の瓦斯から成り立つてゐると云ふのも、等しくバラドックスだ。科學上の眞理は、單に事物の迷はし易き外觀をのみ捉へるところの、日常の經驗から判斷したならば、いつでもバラドックスのものである。

とを、信ぜられるであらう。けれども、その言葉の普通の意味においては、労働の價值といふやうなものとは全く存在しない。既に述べたやうに、一

の商品に結晶された必要労働の高が、そのものゝ價值を構成するのだが、今かういふ價值の概念を適用して、例へば十時間の労働日〔一日十時間の労働〕の價值を、どうして決め得るか？ その日の中に何れだけの分量の労働が含まれてゐるか？ それは十時間の労働だ。〔しかし〕十時間の労働日の價值が、十時間の労働に、または其のうちに含まれてゐる労働の分量に、等しいと云ふのは、同義反覆の、且つまた、無意味の言ひ表してある。勿論、一たび吾々が『労働の價值』といふ表現の眞實なる、しかし隠れたる意味を見出すならば、吾々が價值〔概念〕の此の如き不合理なる、且つ外見上不可能なる適用を説明し得ることは、恰も一たび天體の眞實の運動を確かめると、吾々がこれら天體の外觀的なる又は單に現象的なる運動を説明し得るに至ると、同じであらう。

君を驚かさなければならぬ。諸君の總べては、諸君が日々賣る所のものは諸君の労働だといふこと、従つて労働は一の價格を有すといふこと、また一商品の價格といふのは其のものゝ價值の貨幣的表現なのだから、〔労働についても〕必ず労働の價值といふやうなものが無ければならぬといふこ

〔註一〕『資本論』の英譯には労働力をlabour power としてあるが、茲ではlabouring powerなる文字が用ひてある。

労働者が賣るところのものは、直接に彼れの労働ではなくて、彼れの労働力なのだ、その労働力の處分を一時彼は資本家に委ねるのだ。これが實際の事實だといふことは、——英國の法制では何うなつてゐるか知らぬが、確に大陸の或る國々の法制で、——人がその労働力を賣り得る最長時間が規定されてゐるのを見ても能く分かる。もし労働力を賣ることが、いくらでも無期限に許されたならば、奴隷制がすぐ復活することになる。もし此の如き労働力の賣却が、假りに人の一生に亘るとするならば、その人は直ちに彼れの雇主の生涯の奴隷となるであらう。

イギリスの最も古い經濟學者でまた最も創始的な哲學者の一人——トマス・ホップス——は、既にその著Laviathanにおいて、直覺的にこの點に觸れてゐるが、それは彼れの總べての後繼者によ

つて看過されて仕まつた。彼は曰ふ、『人の價值または値打 (the value or worth of a man) は、すべての他の物におけると同じく、彼れの價格、即ち彼れの力の使用に對して提供せらるゝところのものである。』

この基礎から出て行つたならば、吾々は總べて他の商品の價值と同じやうに、労働の價值を決定し得るであらう。

しかし其れより前に、吾々は次のことを疑問となし得やう、市場には土地や機械や原料や生活資料を有つてゐる〔労働力の〕買手の一組がゐて、これらの人々の有つてゐる物は、原始状態における土地を除けば、すべて労働の生産物であるのに、他方には〔労働力の〕賣手の一組がゐて、それらの人々は彼等の労働力、即ち労働を爲し得るための腕と頭との外、賣るべき何物をも有つてゐない」と云ふ此の奇怪な現象は、どうして起つたのだ？ 一方の組は利潤を得且つ自ら富むために絶えず〔労働力を〕買つて居り、他方の組は彼等の生活資

料を得るがために絶えず〔労働力を〕賣つて居ると云ふことは、どうして起つたのだ？ この問題の研究は、つまり經濟學者が『一次的の又は本原的の蓄積』と稱するもの、しかし正しくは『本原的の所有剝奪』と稱すべきもの、研究になる。「さうして此の問題を研究したならば」、吾々は、この謂ゆる本原的蓄積なるものは、元と労働する人と其の者の労働手段との間に存在してゐた本原的結合の分解を齎すところの、歴史的過程の一系列を意味するに外ならぬことを、發見するであらう。だが、かゝる研究は、私が只今問題とするところの範圍外に横はつてゐる。一たび労働する人と労働手段との間における分離が樹立されたならば、かゝる事態はそれ自身を維持し、且つ絶えず遞増的の規模においてそれ自身を再生産し、かくて遂には、生産方法における一の新たなる且つ根本的なる革命が再びそれを轉覆し、一の新たなる歴史的形態において本原の結合を恢復するに至るまでには已まない。⁰⁴⁾

〔註一〕 previous or original accumulation, erste oder ursprüngliche Akkumulation.

(資本論第一卷第七篇第二十四章参照)

〔註二〕 original expropriation, ursprüngliche Enteignung.

〔註四〕 資本論、第一卷第七篇第二十四章第七節参照。

ところで労働力の價值とは何であるか？

一切の他の商品と同じやうに、労働力の價值もこれを生産するに必要な労働の分量によつて決定せられる。人間の労働力はただ彼れの生ける個體の中のみ存する。「さうして」人間が成長し且つその生命を維持するためには、彼によつて生活必需品の一定量が消費されなければならぬ。しかるに人間は機械と同じやうに消耗する、さうして更に他の人間によつて補充されなければならぬ。だから彼は、彼れ自身の生活維持に要する必需品の分量の外に、一定数の小供、——労働市場で彼に代位し、かくて労働者といふ人種を永續さすため

のもの——を育て上げるため、さらに必需品の他の分量を必要とする。それのみならず、彼れの労働力を發達させ、一定の熟練を習得するためには、更に或る分量の價值が費されなければならぬ。尤も吾々の目的に向つては單に平均労働——その教育と啓發とは殆ど何等の費用を要せざるもの——を考慮すれば足りる。しかし、なほこの機會を捉へて述べて置かなければならぬのは、異なる質の労働力を生産する費用は同じでないから、従つて種々の事業に使用せらるゝ労働力の價値もまた相違しなければならぬと云ふことだ。だから、勞賃の平等を要求する叫聲は、一の謬想に基づくもので、それは到底實現され得ざる無稽の願望だ。それは前提を受入れて而かも結論を避けんとする、かの謬れる且つ淺薄なる急進論の所産である。勞賃制度の基礎の上では、労働力の價值は一切の他の商品の其れの如くに決定される、さうして異なる種類の労働力は異なる價值を有するが故に、即ちそれらの生産に異なる分量の労働

を必要とするが故に、それらのものは労働市場において異なる価格を附せられなければならない。労働制度の基礎の上に立つて平等の報償を要求するのは、——或は公平の報償を要求するのさへ、——それは奴隷制度の基礎の上に立つて自由を要求すると同じである。吾々が何を正義または公平と考へるかは、問題外だ。問題は、一定の生産制

八、剰餘價値の生産

今一人の労働者の日々の生活必需品の平均量は、その生産のため平均労働の六時間を要するものと假定する。なほ平均労働の六時間は、三シリングに等しき或る分量の金に實現されると假定する。さうすれば、三シリングは、その労働者の労働力の日々の價値の貨幣的表現、即ち價格であるであらう。もし彼が日々六時間働くならば、彼は、彼れの日々の生活必需品の平均量を買ふた

度のもとでは何が必然であり不可避であるかに在る。

以上述ぶるところによつて見れば、労働力の價値は、労働方を生産し、發達せしめ、維持し、且つ永續せしむるに要するところの、生活必需品の價値によつて定まるものなることが、分かるであらう。

め、言ひ換ふれば労働者として彼れ自身を維持するため、十分なだけの價値を日々生産することになるであらう。

ところが吾々の問題として人間は賃労働者だ。だから彼はその労働力を資本家に賣らねばならぬ。もし彼がそれを一日三シリング、または一週十八シリングに賣るならば、彼はそれを其の價値において賣つたわけだ。彼を一個の紡績工だと

假定する。しかる時、もし彼にして日々六時間働

くならば、彼は棉花に對し日々三シリングの價値を加へて行くであらう。彼によつて日々加へられるところの此の價値は、彼が日々受取るところの勞賃、または彼れの労働力の價格と、精確なる等價であるであらう。しかし其の場合には、全く何等の剰餘價値も剰餘生産物も資本家に歸しないことになる。そこで吾々は茲ではたと困らなければならぬ。「剰餘價値が何うして出て來るか」と云ふ問題を研究しやうとしてゐるのに、その剰餘價値が出ないことになる。——河上」

資本家は、労働者の労働力を買ひ入れ、その價値を支拂つて仕まへば、一切の他の「商品の」購買者と同じやうに、その買ひ入れた商品を消費しまたは使用する權利を得たのだ。彼は機械を運轉せしむることによつて之を消費しまたは使用するやうに、労働者を働かしむることによつて其の労働者を消費しまたは使用する。だから資本家は、労働者の労働力の一日分または一週間分の價値を買

取ることによつて、全日または全週に亘つて其の労働力を使用したは之を働かしむる權利を得るのだ。勿論、労働日「一日の労働時間」または労働週「一週間の労働時間」には一定の制限があるが、しかし此の事は後に至つてもつと委しく考察するであらう。

差當つて私は諸君の注意を一個の決定點に向けんことを要する。

労働力の價値はこれを維持しまたは再生産するに必要な労働の分量によつて決定される、しかるに此の労働力の使用はただ労働者の精力と體力とによつて制限されてゐるのみだ。労働力の日毎または週毎の價値が、その力の日毎または週毎の發揮と、全然別物だと云ふことは、一匹の馬の要する飼料と、その馬が騎手を乗せて走り得る時間とが、全然別物なのと同じだ。労働者の労働力の價値が規定されるところの労働の分量は、決して彼れの労働力が執行し得る労働の分量の限界となるものではない。再び紡績工の例を取つて見よ。既

に述べたやうに、彼れの労働力を日々再生産するためには、彼は日々三シリングの価値を再生産しなければならぬので、それは彼が日々六時間づゝ働くことによつて爲し得られる。しかし此のことは、彼が一日十時間または十二時間または更により多くの時間を働くことから、彼を妨げるわけではない。ところで資本家は紡績工の労働力の一日分または一週間分の価値を支拂ふことによつて、その労働力を全日または全週に亘つて使用するの権利を得た。だから彼は、労働者をして例へば日々十二時間働かしむるであらう。そこで労働者は、彼れの勞賃を、または彼れの労働力の価値を、恢復するに要する六時間以上に、更に他の六時間を働くことになる、——私はそれを剰餘労働の時間と名づけるであらう、——さうして其の剰餘労働は實現されて剰餘価値となり剰餘生産物となるであらう。もし吾々の例に取つた紡績工が、例へば、日々六時間の彼れの労働によつて、丁度彼れの勞賃に對する精確なる等價を形成する價

値、即ち三シリングを棉花に加へるとするならば、彼は十二時間の内には、棉花に對し六シリングの値打を加へ、且つそれに比例する剰餘の絲を生産するであらう。「ところが」彼は既に彼れの労働力を資本家に賣つてゐるのだから、彼によつて産出された生産物の全價值は、彼れの労働力の一時的所有者たる資本家に歸する。かくて資本家は三シリングを前拂することにより六シリングを實現する、何故なれば、彼は六時間分の労働が結晶されてゐる價值を前拂し、その代りに十二時間分の労働が結晶されてゐる價值を回收するであらうから。これと同じ過程を日々繰り返すことによつて、資本家は日々三シリングを前拂しながら日々六シリングを收める、さうして其の六シリングの半分は再び勞賃の支拂のために出て行くが、残りの半分は、資本家が之に向つて何等の對價を支拂はぬところの、剰餘価値を形成するであらう。資本と労働との間における此の種の交換こそ、資本家的生産または勞賃制度が據つて以て立てる基礎

であり、且つそれは、労働者を労働者として、また資本家を資本家として、絶えず再生産するの結果を齎すべきものである。

すべての他の事情にして同一なりとすれば、剰餘価値の率は、労働日〔一日の労働時間〕のうち、労働力の價值を再生産するに必要な部分と、資本家のために行はるゝ剰餘時間または剰餘労働との間における比例に依存するであらう。即ちそれ

九、労働の價值¹⁾

〔註一〕 標題は、ドイツ譯本には「労働の價值について」としてある。

吾々は今「労働の價值または價格」といふ表現に立ち還らねばならぬ。

既に述べたやうに、それは、事實、労働力の價值を之が維持に必要な商品の價值によつて測定したものに過ぎない。けれども労働者は彼れの労働を終へた後に彼れの勞賃を受取るので、又それの

は、労働者がその労働によつて恰も彼れの労働力の價值を再生産し、または彼れの勞賃を回復すべきだけの範圍を超えて、それ以上に労働日〔一日の労働時間〕の引き延ばされたる比に依存するであらう。

〔註一〕 剰餘價值率についての委しき説明は、資本論第一卷第三篇第七章參照。

みてなく、彼が現に資本家に與へるのは彼れの労働だといふことを知つてゐるので、彼れの労働力の價值または價格は、彼にとつては必然的に、彼れの労働そのものゝ價值または價格であるやうに見える。もし彼れの労働力の價格〔即ち彼が受取る勞賃〕が三シリング——その中には労働の六時間分が實現化されてある——であり、さうして彼が十二時間働くならば、これら十二時間分の労働

は六シリングの價値に實現化されるのだけれども、彼は必然的に、くだんの三シリングを十二時間分の労働の價値または價格と考へる。この事から二つの結果が出てくる。

第一。労働力の價値または價格は、労働そのもの、價値または價格たる外觀を取る、尤も、嚴密に言へば、労働の價値または價格といふのは無意味の言葉だけれども。

第二。労働者の一日の労働の一部分のみが支拂はれ、他の部分は不拂であるに係らず、且つその不拂のまたは剰餘の労働が、正に剰餘價値または利潤の依つて形成せらるゝゆえんの元本であるに係らず、恰も全體の労働が支拂はれた労働であるかの如く見える。

この不實の外観が、賃労働をば労働の他の歴史的形態から區別する。勞賃制度の基礎の上では、不拂の労働さへ支拂はれた労働であるやうに見える。これに反し、奴隷にあつては、彼れの労働の支拂はれた部分さへ不拂であるやうに見える。勿

論、働くためには奴隷は生きて行かねばならぬ、さうして彼れの労働日の一部は彼れ自身の生活資料の價値を回復するために差向けられる。けれども、彼とその主人との間には何等の取引が結ばれず、二者の間には何等の賣買が行はれぬものだから、すべて彼れの労働は無代で取られるやうに見えるのである。

他方に於ては、つい昨日までヨーロッパの東部全體に存在してゐたと謂つても可いところの、かの農奴を取つて見よ。この者は、彼れ自身の農地または彼に當てがはれた農地で、例へば三日間働き、さうして「一週間のうち日曜日を除いての」後の三日間は、彼れの領主の土地で強制的の且つ無償の労働に服する。だから、この場合には、労働のうち支拂はるゝ部分と支拂はれない部分との區別が眼に見えて居り、それは時および場所において分たれてゐる、さうして自由主義者たちは、無代で人を働かすとは怪しからぬ考だといふので、これに向つて盛に道徳的非難を浴びせ掛けたわけ

である。

だが、事實の點では、人が彼れ自身のため彼れ自身の土地で一週のうち三日間働き、さうして残り三日間は彼れの領主の土地で無代で働くのも、或は、工場または仕事場で彼れ自身のために一日のうち六時間働き、更に彼れの雇主のために六時間働くのも、全く同一に歸する。——尤も後の場合には、労働の支拂はれた部分と支拂はれない部分とが分つことの出来ないやうに相互に混り合つ

て居り、且つ全取引の性質は、契約の介在により、また支拂ひは週の終りに受取られるといふことによつて、全然假面を被されてゐるけれども。無償の労働が一の場合には自發的に提供され、他の場合には強制的であるやうに見える。只それだけの差である。

以下私は「労働の價値」といふ語を用うるにして、それはただ「労働力の價値」に對する世間の俗語として用うるまでである。

一〇、商品をその價値において賣ること

よつて得らるゝ利潤

〔註一〕 標題は、ドイツの譯本には「商品を

その價値において賣るとき、利潤は如何にして得らるるか」としてある。

假りに一時間分の平均労働が六ペンスに等しい價値に實現され、または十二時間分の平均労働が六シリング〔一シリングは十二ペンス〕に實現され

るとする。更にまた、労働の價値は三シリングまたは六時間分の労働の生産物だと假定する。しかる時、もし一の商品を作り上げるために消費される原料や、機械や、その他のものに、二十四時間分の平均労働が實現されてゐたとするならば、それらのものの價値は十二シリングに上る筈であ

る。なほまた、資本家によつて使用さるゝ労働者が、これらの生産手段に十二時間の労働を加へるとするならば、これらの十二時間は、六シリングの附加価値として實現さるゝであらう。だから生産物の總體の価値は、實現された労働の三十六時間分に上ほり、十八シリングに等しくなるであらう。だが、労働の価値、即ち労働者に支拂はれた労働賃は、僅に三シリングに止まり、労働者の働いた剰餘労働の六時間分に對して資本家からは何等の等價も支拂はれずして、しかも商品の価値には實現されることになるであらう。だから資本家は、この商品をその價值通りに十八シリングで賣ることにより、彼は彼が之に向つて何等の等價を支拂はざりしところの、三シリングの價值を實現するだらう。この三シリングが、彼によつて收めらるゝ剰餘價值または利潤を構成するであらう。かくて資本家は、彼れの商品をその價值以上の價格で賣ることによつてではなく、その眞實の價值で賣ることにより、三シリングの利潤を實現する

であらう。

一商品の價值は、それに含まれてる労働の總量によつて決まる。だが、その労働量の一部は、その等價が労働の形で支拂はれた價值に實現され、その一部は、これに向つて何等の等價の支拂はれない價值に實現される。商品のうちに含まれてゐる労働の一部は支拂はれた労働であり、一部は不拂の労働である。だから、その價值で、即ちこれに費された労働總量の結晶として、商品を賣ることにより、資本家は必然的に利潤を得てそれを賣る筈になる。彼は彼が等價を費したところのものを賣るばかりでなく、また彼が何物をも費さなかつたところのもの——尤もそれは彼れの労働者に労働を費さしてはゐるが——を賣る。資本家のための商品の出費と、商品の眞價の出費とは、別々の物だ。だから私は繰り返す、正常の且つ平均の利潤は、商品をその眞實の價值以上にでなく、その眞實の價值で賣ることによつて得られると。

一一、剰餘價值が分解するに至る種々なる部分

剰餘價值または商品の總體の價值のなかで、労働者の剰餘労働または不拂労働が實現されてゐる部分、私はそれを利潤と名づける。この利潤の全部は、雇主たる資本家のポケットに這入るのではない。土地の獨占は、その土地が農業上の建築、鐵道、その他如何なる生産上の目的に使用されるやを問はず、これが地主をして、地代の名のもとに、かの剰餘價值の一部を取得するを得せしめる。他方において、労働手段の所有が雇主たる資本家をして剰餘價值を生産せしめ、言ひ換ふれば、不拂労働の一定量を彼れ自身に占有せしむるといふ其の事實は、労働手段の全部または一部を雇主たる資本家に貸してゐるところの、これら労働手段の所有者をして、一言にして言へば、金貸資本家をして、彼れ自身のために伴の剰餘價值の他の部分を、利子の名のもとに請求するを得せしめ、かくて雇主たるの資格において資本家に殘る

ところのものは、産業利潤乃至商業利潤と稱せらるゝ部分だけになる。⁰²

〔註一〕 employing capitalist

〔註二〕 これら剰餘價值の分裂形態は、産業利潤、商業利潤、利子、地代の順序で、資本論第三卷に詳述されてある。

剰餘價值の總高が、此の如く三範疇の人々の間に分割されるについて、如何なる法則がこれを支配してゐるか云ふことは、吾々の主題に全く關係のない問題である。だが、その大半は、以上述べた所から出てくる。

地代、利子、および産業利潤は、商品の剰餘價值の、または商品に封ぜられた不拂労働の、別々の部分に對する別々の名稱たるに過ぎぬ、さうして此等のものは、一樣に此の源泉から、また此の源泉のみから、派出するものである。これらのものは、土地そのものから出るのでもなければ、資本

そのものから出るものでも無い、けれども土地と資本とはこれが所有者をして、雇主たる資本家が労働者から搾取した剰餘價值の中から、それ／＼の割前を得せしめる。労働者自身にとつては、この剰餘價值を、彼れの剰餘労働または不拂労働の結果を、雇主たる資本家が全部ポケットに入れて仕まはうと、或は雇主たる資本家がその一部を、地代と利子の名義で、第三者に支出するを餘儀なくせられやうと、それは太した問題ではない。雇主たる資本家が自分の所有して居る資本のみを使用し且つ彼れ自身が地主であると假定するならば、全部の剰餘價值が彼れのポケットに収まるであらう。

雇主たる資本家は、剰餘價值の如何なる部分を窮極自分自身の所屬に歸し得るとしても、「ともかく」この剰餘價值を直接に労働者から搾取するのは彼である。だから、雇主たる資本家と賃労働者との間における此の關係の上に、賃賃制度全體および現在の生産制度全體が懸つてゐる。それゆ

へ、この討議に参加された諸君の或者が、雇主たる資本家と労働者との間における此の基本的關係を第二次的の問題として取扱ひ、この關係を曖昧にしやうとされたことは、誤りだつたのである、——尤もその人だが、價格の騰貴は、一定の事情のもとで、雇主たる資本家、地主、金貸資本家に對して、それからまた收稅吏に對しても、甚だ不平等な程度に影響を及ぼす、と主張されたことは正しかつたけれども。

上に述べたことから、も一つ他の結果が生ずる。商品の價值のなかで原料や機械やの價值を、一言にして云へば、消費された生産手段の價值を、代表してゐるに過ぎない部分は、全く何等の收入を形成することなく、ただ資本を恢復するに過ぎない。「生産されたる商品の價值が、すべて賃賃、利潤、地代等の收入に分解すると考へるのは、誤りである。——河上」しかしそれとは別に、收入を形成するところの、即ち賃賃、利潤、地代、利

子の形で費され得るところの、商品の價值の他の部分が、賃賃の價值、地代の價值、利潤の價值等に依つて構成されてゐるといふのは、誤りである。吾々は先づ賃賃を合いて、産業利潤と利子と地代とのみを論じやう。今述べたやうに、商品に含まれてゐる剰餘價值、即ち商品の價值のなかで不拂労働の實現されてゐる部分は、三つの異なる名稱を有する異なる部分に分たれる。だが、商品の價值がこれら三つの構成部分の獨立せる價值の和によつて組成され或は形成されてゐる、と云ふのは、全く眞實の正反對である。

もし一時間の労働が六ペンスの價值に實現され、労働者の労働日が十二時間を含み、この時間の半分が不拂労働であるとすれば、その剰餘労働は商品に三シリングの剰餘價值——即ち何等の等價の支拂はれてゐない價值——を附加するであらう。この三シリングの剰餘價值は、雇主たる資本家が何等かの割合で地主および金貸しと分配し得るところの、全元本を構成する。この三シリングの

價值は、彼等が彼等の間に分配すべき價值の限度を成すのである。けれども、雇主たる資本家が商品の價值に自分の利潤として任意の價值を加へ、それに他の價值が地主等のために附け加へられ、かくして任意に定められた此等の價值の和が、總體の價值を構成するといふわけではない。だから、一定の價值を三つの部分に分解すること、三つの獨立した價值の合計によつて一定の價值を形成すること、を混同し、かくして地代、利潤および利子の引き出される總價值を任意の大いさに轉化するところの、通俗の見方が誤りだといふことが分かる。

〔註三〕 Theorien über den Mehrwert, Bd.

I. B. 3. S. 158 以下〔剰餘價值學說史〕大

原社會問題研究所譯本、第一卷第二分冊、

三四頁以下)參照。

もし資本家によりて實現せられた總體の利潤が百ポンドであるならば、絶對的の大きさとして觀察されたる此の額を、吾々は利潤の高 (the amount)

of profit)と呼ぶ。しかし、もし吾々が、出資された資本に對してこれら百ポンドの有する比を計算する時は、吾々はこの相對的の大きさを利潤率と呼ぶ。この利潤率は明かに二様の方法において言ひ現され得る。

〔註四〕 invest (放下する) と區別するため
に advance を出資すると譯出する。後者にはまだ放下されぬものをも含む。

假りに百ポンドを以て勞賃のため出資された資本だとする。「然る時」もし作り出された剰餘價值が同じく百ポンドであるとすれば、——このことは勞働日の半分が不拂勞働から成り立つことを示す。——さうして吾々がこの利潤をば勞賃のため出資された資本の價值で測るとするならば、吾々は利潤率は百パーセントに上ぼると言ふべきであらう、何故なれば、出資された價值は百であり、實現された價值は二百であるから。

これと異り、もし吾々が、ただに勞賃のために出資された資本のみならず、出資された總體の資

本、例へば五百ポンド——そのうち四百ポンドは原料、機械、その他のもの、價值を代表するとする——について考へるならば、吾々は利潤率は單に二十パーセントに上ぼるに過ぎないと言ふべきであらう、何故なれば、百ポンドの利潤は出資された總體の資本の五分の一に過ぎないから⁵⁾

〔註五〕 ドイツ語の譯本に附註してあるやうに、資本論では、マルクスが茲で二種の利潤率といつてゐるものうち、第二のもののみを利潤率といひ、第一のものは之と區別して剰餘價值率といつてゐる。

利潤率の最初の言ひ現し方が、支拂勞働と不拂勞働との間における眞實の比を、即ち勞働の掠奪 exploitation ——このフランス語を使ふことを許して貰ふ——の眞實の比を、吾々に示してくれる唯一のものである。今一つの言ひ現し方は、普通に使はれてゐるもので、且つ確に或る目的には適合してゐる。何にしる、それは、資本家が勞働者から無償の勞働を絞取る度合を隠すに、甚だ都合な

ものである。

私は以下なほ若干の考察をなすに當り、剰餘價值が種々の部分に分割されることには頓着なしに、資本家の絞り取る剰餘價值の全量を指すには、利潤なる語を用ひ、さうして利潤率なる語を用う

一、二、利潤、勞賃、および價格の一般關係

一商品の價值から、その商品に費された原料やその他の生産手段の價值を回復すべき價值を引き去るならば、即ち、それに含まれてゐる過去の勞働を代表する價值を引き去るならば、その價值の残りは、最後に「その商品の生産過程において」使用された勞働者によつて加へられた勞働の分量に分解するであらう。もしその勞働者が一日に十二時間働くならば、且つ平均勞働の十二時間が六シリングに等しき金の分量に結晶するならば、この場合六シリングなる附加價值は、彼れの勞働の作

るには、私はいつでも勞賃のために出資された資本の價值によつて利潤を測るであらう⁶⁾

〔註六〕 前に注意したやうに、以下利潤率とあるは、資本論における剰餘價值率に相當する。

り出した唯一の價值である。彼れの勞働時間によつて決定せらるゝ、この一定の價值は、彼および資本家の兩者がそれ／＼彼等の割前または配當を引き出す唯一の元本であり、勞賃および利潤に分割されるべき唯一の價值である。この價值が兩者の間に分割され得る比割が變つたからとて、この價值そのものゝ變化せざることは、言を俟たない。また一人の勞働者の代りに勞働者全體を、一勞働日の代りに例へば千二百萬の勞働日を、置き換へたからと言つて、話は何の變りもない筈である。

さて資本家と労働者とは、ただこの限りある価値を、即ち労働者の全労働によつて測られる価値を、分け取るに過ぎぬのだから、一方が餘計取れば他方は少く取り、一方が少く取れば他方は餘計取ることになる。如何なる場合でも分量が決まつて居れば、その一部分は他の部分が減少するに逆比例して増加するであらう。もし労賃が變動すれば、利潤はそれと反対の方向に變動するであらう。労賃が下落すれば、利潤は騰貴するし、労賃が騰貴すれば、利潤は下落するであらう。前に掲げた假定の下に、もし労働者がその作り出した価値の半分に等しいだけ即ち三シリングを得るならば、言ひ換ふれば、彼れの全労働日が半分は支拂はれた労働から、半分は不拂の労働から成り立つならば、資本家もやはり三シリングを得るわけだから、利潤率は百パーセントになるであらう。もしまた労働者は僅に二シリングを得るだけであつて、即ち全労働日の僅に三分の一を彼れ自身のために働くに止まるとするならば、資本家は四シ

リングを得、さうして利潤率は二百パーセントになるであらう。もしまた労働者が四シリングを得、資本家は僅に二シリングを得るに止まるならば、利潤率は三十三¹⁾パーセントに下落するであらう。だが、すべてこれらの變動は、商品の価値には影響せぬであらう。だから、労賃の一般的騰貴は、一般利潤率の下落を招くだらうが、「商品の」価値には影響しない。しかし、たとひ商品の価値——それは窮極において其の市場価格を規定すべきもの——は、それに固定された労働の全量によつて専ら決定せられ、その労働が支拂はれた労働と不拂の労働とに分割せらるゝ割合によつて左右せらるゝものでないとは云へ、そのことからして、例へば十二時間内に生産された或る一單位の商品または一組の商品の価値がいつても不變だ、といふことになるわけでは決してない。一定の労働時間内に、言ひ換ふれば、一定分量の労働を以て、生産せらるゝ商品の數または高は、使用せらるゝ労働の生産力に依存するので、その労働

の廣さまたは長さに依存するのではない。紡績労働の生産力の或る程度を以てすれば、例へば十二時間の労働日で十二ポンドの糸を生産し、生産力のより少き程度を以てすれば、僅に二ポンドしか生産し得られない。この場合、もし十二時間の平均労働が六シリングの価値に實現せらるゝならば、第一の場合には十二ポンドの糸が六シリングに値し、第二の場合には二ポンドの糸が同じく六シリングに値するであらう。だから一ポンドの糸が、一の場合には六ペンス〔一シリングは十二ペンス〕に値し、他の場合には三シリングに値するであらう。價格の差異は、使用せらるゝ労働の生産力の差異から生ずる。より大なる生産力を以てすれば、一時間の労働が一ポンドの糸に實現され、より小なる生産力を以てすれば、六時間の労働が一ポンドの糸に實現されるであらう。一方の場合には、労賃は比較的に高くて利潤率は低くとも、糸一ポンドの價格は僅に六ペンスであり、他方の場合には、労賃は低く利潤率は高くとも、そ

れは三シリングであらう。斯様なことになるのは、糸一ポンドの価値はそれに費された労働の總量によつて規定せられ、その總量が支拂はれた労働と不拂の労働とに分割される比によつて左右されぬがためだ。價格の高い労働でも安い商品を生産し、價格の安い労働でも高い商品を生産し得るものだ、といふ私の前に述べた事實は、それゆへに、その自家撞着の外観を解く。それは、すべて商品の価値はこれに費された労働の分量によつて規定されるものであり、さうして其れに費される労働の分量は使用せらるゝ労働の生産力に全く依存するものであり、従つてまた、労働の生産力の一切の變動に應じて變動するものだ、といふ一般的法則の表現に過ぎない。

〔註一〕 五十パーセントとあるべき筈。(社會労働黨發行のイギリス版およびドイツ譯本の脚註参照)

一三、勞賃の値上げが企てられ又はその引下げが抗爭せらるゝ主要の場合

吾々は今慎重に、勞賃の値上げが企てられ又はその引下げが抗爭せらるゝ主要の場合を考究するであらう。

一。吾々の既に述べたる如く、勞働力の價值、または一層通俗の俗語でいへば、勞働の價值は、生活必需品の價值によつて、または其等のものを生産するに要する勞働の分量によつて、決定せられる。しからば、もし一定の國において、勞働者の日々の平均必需品の價值が、三シリングで言ひ現されるところの六時間分の勞働を代表するものとすれば、勞働者は彼れの日々の生活資料に對する等價を生産するために、日々六時間働かなければならぬだらう。もし全勞働日「一日の勞働時間全體」が十二時間だとすれば、資本家は彼に三シリングを拂ふことによつて、彼にその勞働の價值

を支配せらるゝ。そこで勞働日の半分が不拂の勞働となり、利潤率は百パーセントに上るであらう。しかし今、生産力の減退の結果、例へば同じ分量の農産物を生産するのに、より多くの勞働を要することになり、かくて日々の平均必需品の價格は、三シリングから四シリングに騰貴したと假定せよ。さうしたならば、勞働の價值は三分の一、即ち三三 $\frac{1}{3}$ パーセントだけ高まるであらう。勞働者が以前の生活標準により、彼等日々の生活維持に對する等價を生産するためには、勞働日のうち八時間が必要とされるであらう。だから剩餘勞働は六時間から四時間に減じ、利潤率は百パーセントから五十パーセントに落ちるであらう。ところで「かゝる場合に」勞働者が勞賃の値上げを要求するのは、あらゆる他の商品の賣手が、彼れの

商品の費用が増加した時に、その増加した價值の支拂を受けんと企てるのと同じで、彼はただ彼れの勞働の増加した價值を得んと主張するに過ぎぬであらう。もし勞賃が騰貴しないか、または「騰貴したにしても」必需品の増加せる價值を相殺するだけに十分騰貴しないならば、勞働の價格は勞働の價值以下に落ち、かくて勞働者の生活標準は退化するであらう。

ところで變化はまた、これと反對の方向にも起り得る。勞働の生産力の増加したお蔭で、日々の平均必需品の同じ額が三シリングから二シリングに下落し、「勞働者の」日々の必需品の價值に相當する等價を再生産するに、以前は勞働日「一日の勞働時間」のうち六時間を要したものが、僅に四時間で済むといふやうなことが起り得る。この場合には、勞働者は、以前三シリングで買ひ得たのと同じだけの必需品を二シリングで買ひ得るだらう。勞働の價值は、實際に下落するにしても、その減少した價值は、以前と同じだけの分量の商品

を支配し得るであらう。かくて利潤は三シリングから四シリングに上り、さうして利潤率は百パーセントから二百パーセントに上るであらう。「かゝる場合には」勞働者の絶對的の生活標準は依然同じでも、彼れの相對的勞賃、從つてまた、資本家のそれと比較しての彼れの相對的社會地位は下落するであらう。もし勞働者がこの相對的勞賃の下落に反抗するとしたならば、それはただ、彼れ自身の勞働の生産力増加に對し若干の割前を得、かくて社會上の地位における從前の相對的地位を維持せんと企つるに過ぎぬ。かやうなわけで、イギリスの工場主は、穀物條例「外國より輸入する穀物に關稅を課したる法律」の廢止後——穀物條例廢止運動の際に與へたる、あれほど嚴肅な誓約を、無茶苦茶に破つて仕まつて——一般に十バアセントだけ勞賃を引き下げてしまった。勞働者の反抗は最初には破れた、²⁾しかし、今委しく述べることにはできぬが、種々の事情の結果として、失はれた十バアセントはその後再び恢復せられ

た。

〔註一〕 資本家の所得となるべき利潤に對する關係から見た勞賃、即ち總生産物に對する勞賃の割前。資本論第一卷第四篇『相對的剩餘價値の生産』および拙譯『勞賃と資本』(大正十三年版)四四頁參照。

〔註二〕 一八四六—四七年は非常なる事業停滯の年であつた。(ドイツ譯本脚註)

二。必要品の價値、從つて勞働の價値は、依然同じでありながら、貨幣の價値に先づ或る變化が起つた結果、それらのもの、貨幣價格の上に變化が起るといふことがあり得る。

以前よりも豊富な鑛山の發見やその他の事情のために、例へば二オンスの金が、以前一オンスの金に掛かつただけの勞働で生産できるやうになつたとする。さうすれば、金の價値は二分の一、即ち五十パーセントだけ減少するだらう。そこで、すべての他の商品の價値は、それらのもの、從前の貨幣價格の二倍で言ひ現されるやうになるであ

らうし、勞働の價値もまた同様な筈である。「從つて」以前は六シリングで現されてゐた十二時間分の勞働も、今は十二シリングで現されるであらう。「しかるに」もし勞働者の勞賃が六シリングに上る代りに、三シリングで留まつてゐるやうなことがあつたならば、彼れの勞働の貨幣價格は僅にその價値の半ばに過ぎないことになり、彼れの生活標準は恐ろしく退化するであらう。このことは、もし彼れの勞賃が騰貴しても、金の價値の下落に比例しないならば、やはり多少の程度において起るであらう。この場合、勞働の生産力にも、需要および供給にも、また價値にも、何等の變化が起つたのではない。ただこれらの價値の貨幣呼稱に變化が起つただけのことである。今かゝる場合に勞働者は勞賃の比例的騰貴を主張すべきでないこと云ふのは、彼は實物でなしに、名目で支拂はれることに満足しなければならぬと云ふやうなものだ。すべて過去の歴史の證明するところによれば、此の如き貨幣の減價が起つた場合には、資本

家はいつでも、勞働者を騙すに好都合なこの機會を捉へるために油斷なく眼を配つてゐる。大多數の經濟學者の證言するところによれば、金鑛地方の新たな發見や、銀鑛の作業の改善や、水銀の供給の廉價となりしことやの結果として、今や貴金屬の價値は再び下落して來た。勞賃を高めんとする企てが大陸において一般的に且つ同時に起つて居るのは、この事から説明され得るだらう。

三。今まで吾々は、勞働日(一日の勞働時間)は一定の限度を有つたものと假定して來た。だが、勞働日は、それ自身に決して不變の限度を有つものではない。これをば生理的に可能なるその極度の長さまで延ばさうと云ふのが、資本家の不斷の傾向だ、それは同じ程度において剩餘勞働が、從つて其れから生ずる利潤が、増加する筈であるからだ。資本が勞働日を長くするに成效すればするほど、それは他人の勞働のより大なる分量を占取するであらう。第十七世紀を通じ、また第十八世紀に入つても最初の三分の二の期間には、十時間

といふ勞働日が、イギリス全體に亘つての通常の勞働日であつた。反シャコピン戦争——それは事實においては、イギリスの勞働者團に對しイギリスの貴族によつて仕向けられた一の戦争であつた——の間、資本はバックカスの酒神を祝うた、さうして勞働日を十時間から、十四時間、十八時間に延ばした。マルサスは、萬々涙脆い感傷主義の人ではなかつたが、彼は一八一五年頃に一つのパンフレットを著し、もしこの種の事態が繼續されたなら、國民の生命はその根本の泉から破壊されるに至るだらう、と宣言した。新たに發明された機械が一般に應用されるに至る數年前、約一七六五年代に、An Essay on Trade (實業論)といふ標題のもとに、一つのパンフレットがイギリスで公にされた。その匿名の著者——公然勞働階級の敵たることを名乗れる著者——は、勞働日の限界を擴張するの必要を切言した。彼はこの目的に對する種々の手段のなかで、勞役場(working house)を設けることを主張してゐるが、彼れの言ふとこ

るによると、それは『恐怖の屋舎』(Houses of Terror)たるべきものだ。しからば彼がこれら『恐怖の屋舎』に對して指定した労働日の長さは何れだけか？ それは十二時間だ、——資本家や經濟學者や諸大臣やが、ただにその現行の労働時間たるを認むるのみならず、十二歳以下の小供に向つてさへ必要な労働時間だと認むるところのものと、それは正に同一の時間だ。

労働者は彼れの労働力を賣ることによつて、——彼は現在の制度のもとでは、さうしなければならぬのだ、——その労働力の消費を資本家に譲り渡すのだが、しかしそれは一定の合理的限度の内においてだ。彼が彼れの労働力を賣るのは、その自然の消耗は別にして、これを維持せんがためて、これを破壊せんがためではない。彼れの労働力をその一日分または一週間分の價値で賣るに際しては、一日または一週のうちにその労働力が二日分または二週間分の損耗に委せられざることが了解されてある。假りに千ポンドに値する機械を

取つて見よ。もしそれが十年間に使用し盡されるならば、それはその生産を助けた商品の價値に對して、年々百ポンドを附加するであらう。もし又それが五年間に使用し盡されるならば、それは年々二百ポンドを附加するであらう。言ひ換ふれば、その年々に消耗する價値は、それが消費せらるゝ速度に逆比例する。ところが労働者は正にこの點において機械と分つところがあつた。機械はそれが使用せらるゝと正確に同じ比例で消耗するわけではない。人はこれに反し、労働給付の單なる數字的合算で見られるよりも、より大なる比例において衰へる。

〔註三〕 資本論第一卷第三篇第八章第一節參照。

労働者は、労働日を以前の合理的範圍に短縮せんとする彼等の企において、また彼等が正常労働日の法的規定を強制することのできぬ所では、賃金の引上げ——それはただに誅求せらるゝ剩餘時間に比例するよりも、より大なる比例における引

上げ——により、過重の労働を防止せんとする彼等の企において、彼等は彼等自身および彼等の種屬に對する義務を履行するに過ぎない。彼等は纔に之によつて資本の飽くなき篡奪に制限を置く。時間は人間の發達の場所である。勝手に處理することのできる自由の時間を有たぬ人間、そのものの全一生が、睡眠や食事やその他の單に生理的〔に必要〕なる中斷を除外すれば、すべて資本家のためにする彼れの労働によつて吸收されてゐる人間、それは牛馬よりも憐れなものだ。彼れは外國行きの富を生産するための單なる機械で、からだは壊され、心は獸化される。しかも近代産業の全史が示すところによれば、資本は、もし妨げられずんば、全労働階級をば、この極度の退化状態に陥れるために無茶苦茶の働きをするものだ。資本家は労働日を延ばすことにおいて、より高き賃金を支拂ひながら、しかも労働の價値を低め得るであらう、賃金の騰貴が誅求せらるゝ労働のより大なる量に相應せず、かくて労働力のより速

なる衰頹が惹き起さるゝ場合が、即ちそれである。このことは他の方法でも行はれる。諸君の有産者的統計家は、諸君に告ぐるに、例へば、ランカシアにおける職工の家族の平均賃金が騰貴したことを以てするであらう。「しかも實際においては」、戸主たる男子の労働の代りに、今日では彼れの妻および恐らくは三、四名の小供等までが、資本のジャガアノートの車輪のもとに投ぜられて居り、かくて〔謂ふところの〕賃金總額の騰貴は、一家族から誅求せらるゝ剩餘労働の總額に、決して相應してはゐないのだが、彼等はその事實を忘れてゐるのである。

〔註四〕 印度の神話におけるクリシュナの偶像、——毎年この像を巨大なる車に乗せ行列をなして牽き廻り、信徒これに轢き殺さるれば、極樂へ行けると信じ、自らその車の下に身を投ぜしものと云ふ。

労働日に一定の制限が設けられてゐる場合に於いては、——工場法の適用されてゐる總べての

産業部門には、今日此の如き制限が存在してゐるが、——労働の價値の從來の標準を維持して行くだけにでも、労賃の騰貴は必要となり得る。「何故といふに」労働の集約度 (intensity) の増加のために、人は一時間内に、彼が以前二時間内において消費したと同じだけの生命力を消費するやうにさせられる。工場法のもとに置かれてゐる事業においても、機械の運轉速度の増進や、一人の人間がその監視を受持つべき作業機械の数の増加せしことによつて、如上の事實は既に或る程度まで實現されてゐる。もし労働の集約度、言ひ換へれば、一時間内に費さるゝ労働量の増加が、労働日の長さ「一日の労働時間」の短縮と然るべき比例を保つならば、労働者は猶ほ得るところがあるであらう。「けれども」もしこの限度を超えるならば、労働者は一の形において得たものを他の形において失ふ、さうしてさうなれば、十時間の労働は以前の十二時間の労働と同じ程度に破滅的となるであらう。労働者は、その労働の集約度の高ま

るに相應するだけの労賃の値上げに努力することにより、上記の如き資本の傾向を妨ぐることに於いて、ただ彼れの労働の退化と彼れの種屬の退化とに反抗するに過ぎない。

〔註五〕労働の生産力の増進と、能率の増進とは、明白に區別しなければならぬ。労働の生産力が増加した場合には、同じ分量の労働でより多くの生産物が生産され、従つて一單位の生産物に含まるゝ労働量はより少くなり、従つてまたその價値が減少するのである。これと異り、労働能率といふのは、一定の時間内により多くの労働が支出されるのである。従つて、その結果として同一の時間内に生産せらるゝ生産物の分量が増加したとしても、一單位の生産物に含まるゝ労働量には變化がないのである。資本論第一卷第四篇第十三章第三節參照。

四。諸君の總べては、資本家的生産が、私の今説明を省略する種々の原因から、一定の定期的な

循環を経て動くことを知つて居られる。それは靜穩、遞増的活氣、好景氣、事業過剩、恐慌、停滯の状態を通じて動く。諸商品の市場價格と利潤の市場率とは、これらの局面に伴うて、今その平均の下に沈んだかと思へば、またその上に上ぼる。一周期全體について考察したならば、諸君は、市場價格の一の歪みは他の歪みによつて相殺されると云ふこと、およびその一周期を平均すれば、諸商品の市場價格はその價値によつて規定されると云ふことを、發見せらるゝであらう。さて、市場價格下落の時期と恐慌および停滯の時期とを通じ、労働者がもし全然業を失ふに至らなければ、彼等の労賃が引下げられるといふことは確である。「だが」、騙されて濟まず積りでなければ、此の如き市場價格下落の際においても、労働者は資本家に對し、如何なる比例的程度において労賃の引下げが必要となつたかを争はなければならぬ。もし超過利潤の得らるゝ好景氣の時期において、労働者が労賃の値上げのために戦つてゐな

つたならば、産業的循環の一期を平均して見て、彼は彼れの平均労賃即ち彼れの労働の價値さへも受取らぬことになるであらう。周期中の不景氣時代には彼れの労賃が當然に引下げられるのに、周期中の好景氣時代に補償を求めないやうにしなければならぬと要求するが如きは、愚の骨頂である。一般的に、すべての諸商品の價値は、需要と供給との超えざる變動より生ずるところの、不斷に變化しつゝある市場價格の「高低の」相殺によつて、始めて實現せられる。現在の制度の基礎においては、労働も他の商品と同様な一商品に過ぎない。だから労働もまた、同一の波動を通過しながら、その價値に相應するだけの平均價格を掴まねばならぬ。一方において労働を一個の商品として扱ひながら、他方において之をば商品の價格を規定する諸法則から除外しやうとするのは、不都合であらう。奴隷は生活資料について永續した固定した量を得てゐるが、賃労働者はさうでない。彼は、他の場合における労賃の下落を補償するだ

けにでも、一の場合において勞賃の値上げを獲得すべく試みなければならぬ。もし彼が資本家の意志、指圖をば、永久の經濟法則として受入れることに甘んずるならば、彼は奴隸の安固を享受することなしに、奴隸と一切の貧窮を分つに至るであらう。

私の以上述べた總べての場合において、——さうして其れは「實際の場合の」百中の九十九を占めてゐるが、——諸君は、勞賃値上げの要求はこれに先てる變化の足跡からのみ生ずるので、それは生産の分量や、勞働の生産力や、勞働の價值や、

一四、資本と勞働との闘争および其の結果

一。私は既に、勞賃の値下げに對する勞働者側の時々の抗争、および勞賃の値上げを獲得せんとする彼等の時々の企畫は、勞賃制度から離すことのできぬものであり、それは勞働が諸商品と同一視されて居り、従つて勞働は價格の一般的變動を

貨幣の價值や、誅求せらるゝ勞働の長さまたは集約度や、需要供給の動搖に依存し且つ産業的周期の種々の時期に適應するところの、市場價格の動搖に關する、先行變化の必然的産物であり、一言にして蔽へば、資本の先行動作に對する勞働の反動である、といふことを發見せらるゝであらう。勞賃値上げの闘争を總べて此等の事情から獨立させて取扱ひ、勞賃の上に起る變化をのみ見て、その事の由つて生じた他の諸變化を看過するならば、諸君は過つた結論に到達せんために過つた前提から出發してゐるのである。

ここで最後に起る問題は、資本と勞働との間における此の絶ゆることなき闘争において、勞働は果して如何ほどまでの成功をなし得べきか、といふことである。

私は一般化してこれに答へ得る、さうして、すべて他の商品におけると同じやうに、勞働についても次の如く言ひ得る、曰く、その市場價格は、長期の間には、その價值に順應する、だから一切の高低に拘らず、また勞働者が如何なることをしやうとも、彼は平均において、ただ彼れの勞働の價值——それは彼れの勞働力の價值に歸着し、さうしてその勞働力の價值はこれが維持と再生産とに要する必要品の價值によつて決定され、またそれら必要品の價值は窮極これらのものを生産する勞働の分量によつて規定される——を受取るだけである。

だが、勞働力の價值または勞働の價值には若干の特徴があつて、すべての他の商品の價值と區別さるゝところがある。勞働力の價值は二つの要素

規定する諸法則に従ふといふ事實そのものによつて指定されてゐる、といふことを明かにし、更にまた、勞賃の一般的騰貴は一般利潤率の下落を齎すが、しかし諸商品の平均價格または價值に影響するものではない、といふことを明かにした。そ

——一は單に生理的のもの、他は歴史的または社會的のもの——によつて形成せられる。その窮極の限度は生理的要素によつて決定せられる、言ひ換ふれば、勞働者階級はそれ自身を維持し且つ再生産し、その生理的存在を永續さすために、生存と繁殖とのため絶對に缺ぐべからざる必要品を受取らねばならぬ。だから、これら缺ぐべからざる必要品の價值は、勞働の價值の窮極限度を形成する。他方において、勞働日〔一日の勞働時間〕の長さもまた、窮極の、尤も可なり屈伸性に富んだ、限界によつて制限せられる。その窮極の限度は、勞働する人の生理的の力によつて定まる。もし彼の生命力の日々の消費が一定程度を超過するならば、それは日々繰り返し發揮され得ない。しかし、既に言つたやうに、この限度は甚だ屈伸性に富んでゐる。不健康な且つ短命なゼネレーション〔生代〕を急ぎ目に續けて行けば、元氣な且つ長命なゼネレーションの系列と同じやうに、勞働市場を維持して行くことができる。

この單なる生理的要素に加へて、労働の價值は如何なる國においても、因襲的の生活標準¹⁾によつて決定せられる。それは、單なる生理的の生活「生きて行くといふだけのこと」ではなく、人々がその下に置かれ且つその下で育てられるところの、社會的諸條件から出てくる一定の慾望の満足である。「尤もこれは生存上絶對的に必要だと云ふわけではないから」イギリスの生活標準はアイルランドの標準に引下げられ、ドイツの百姓の生活標準はリヴォーニアの百姓のそれに引下げられ得る。この歴史的の因襲および社會的の慣習が如上の點につき重大な關係を有つてゐると云ふことは、ソントン氏の『人口超過』に關する著書から、諸君の學び得るところだ。氏はこの著書において、イギリスの種々の農業地方における平均賃金は、それらの地方が農奴の状態から出て來た當時の事情が好かつたと否とに應じて、今日でも猶ほ大小の差を有することを示してゐる。

〔註一〕それが前にいふ歴史的または社會的

の要素である。

労働の價值のなかに入り込む此の歴史的または社會的の要素は、擴げることでもできれば、縮めることもでき、或は生理的の限度しか何物も残らぬやうに、全く無くして仕まふこともできる。反ジャコビン戦争——それは、度し難き尸位素餐者たる老ゾーヂ・ローズが常に云つてゐたやうに、吾々の神聖なる宗教の慰安をフランスの異教徒共の侵害から救はうとして起されたものであるが——の間には、吾々が前の章において随分優しく取扱つておいたあのイギリスの善良な農業經營者たちは、農業労働者の賃金を單なる生理的の最小限以下にすら引き下げ、この種族の生理的の永續に必要なその不足部分は救貧法によつて補つたのである。これは賃労働者を奴隷に化し、シェークスピアの描いた自負心ある小作農を被救恤民たらしむる最上の方法であつた。

諸君は遠つた國々における標準賃金または労働の價值を比較することにより、また同じ國の遠つ

た歴史時代について之を比較することにより、労働の價值そのものは——たとひ總べての他の商品の價值は不變のまゝである——と假定しても——固定しない、可變的の大きさのものだ、と云ふことを發見せらるゝであらう。

同様の比較は、ただに利潤の市場率が變動するのみでなく、その平均率もまた變動する、といふことを證明するであらう。

だが利潤については、その最低限を決定すべき何等の法則も存在しない。その低下の窮極の限度は何うだと云ふことを、吾々は言ひ得ないのである。何故吾々はその限度を確定し得ないか？ それは、吾々は賃金の最低限を確定し得るけれども、その最高限を確定し得ないからである。吾々のただ言ひ得るところは、もし労働日「一日の労働時間」の限度が決まつてゐるならば、利潤の最高限は賃金の生理的の最低限「労働者の生活の最低限度」に相應するといふことも、また賃金が決まつてゐるならば、利潤の最高限は、労働者の生理的

精力と兩立し得るかぎりの、労働日「一日の労働時間」の延長に相應するといふこと、これである。だから利潤の最高限は、賃金の生理的の最低限と、労働日の生理的の最高限とによつて制限せられる。この利潤率の最高限の二つの限度間において、變動の廣大な等差が可能だといふことは、言を俟たない。その現實の程度の確立は、ただ資本と労働との間における絶えざる闘争——資本家は賃金をその生理的の最低限に引下げ、また労働日とその生理的の最高限に延ばさうと絶えず努めてゐるのに、他方労働者はこれと反對の方向に絶えず壓してゐる——によつてのみ決定せられる。

事態は闘争者同志の相互の力の問題に歸する。二。イギリスにおける労働日の制限に關しては、すべての他の國々におけると同じやうに、それは立法的の干渉によらなければ到底決定されなかつた。この干渉も、外部からする労働者の絶えざる壓迫がなかつたならば、到底起らなかつたであらう。ともかく、この結果は、労働者と資本家と

の間における私的協約では得られなかつたものである。此の如き一般的な政治活動の必要それ自身が、單なる經濟的活動においては資本がより強き側だといふことの證據を提供する。

勞働の價値の限度に關しては、その現實の決定は、いつでも需要と供給とに依存すると言ひ得るが、茲に需要と謂ふのは資本の側における勞働の需要を意味し、供給と謂ふのは勞働者による勞働の供給を意味する。殖民地諸國においては、需要供給の法則は勞働者に仕合せする。だからアメリカでは比較的勞賃の標準が高い。そこでも資本はその出来るかぎりの事を試みてはゐるが、ただ、賃勞働者が絶えず獨立自存の農民に轉化することによつて、勞働市場が絶えず不足勝ちにされるのを、妨げることはできない。アメリカ人の大多數にとつて、賃勞働者といふ地位は一の見習状態に過ぎぬので、彼等は早かれ晩かれ「中等階級に上ほることにより」その地位を去ることが確かであるのだ。かゝる殖民地の状態を改良するため

に、母國たるイギリスの政府は、暫らくの間、謂ゆる近代の殖民説を受け容れて、賃勞働者が餘りに速やかに獨立農民に化するのを防ぐために、殖民地における物價を人工的に高價ならしめたのである。

〔註二〕 資本論第一卷最後の章『近世殖民論』（拙著『資本論略解』第一卷第三分册、二〇二頁以下）参照。

更に吾々をして、資本が生産の全過程を支配してゐる舊文明諸國に移らしめよ。例へば、一八四九年より一八五九年に至る間のイギリスにおける農業勞賃の騰貴を取つて見よ。その結果はどうであつたか？ 農業經營者は、——吾々の友人ウェストンならば、彼等にさう助言するだらうと思ふが、——小麦の價値を高めることも、その市場價格を高めることさへも、できなかつた。却て逆に、彼等はその下落に逢つた。だが彼等は、これら十一年の間に、すべての種類の機械を應用し、より科學的方法を採用し、耕地の一部を牧地に

轉換し、農地の大きさを、従つて生産の規模を擴大し、かくて此等およびその他の方法で、勞働の生産力を増すことにより、勞働に對する需要を減少し、再び農業上の人口を比較的過剩ならしめた。勞賃の騰貴に對する——或は早き或は晚き——資本の反動が、舊開國において取るところの一般的方法は、即ちこれだ。機械は勞働と絶えざる競争の地位に在るもので、「たとひ或る機械が發明されても、それは」勞働の價格が一定の高さに達した後に始めて採用せらるゝに至ることが屢々であるとは、リカアドの正しく注意したところだが、しかし機械の應用は、勞働の生産力を増加するための多くの方法の一つに過ぎない。「なほ」普通勞働者を比較的過剩ならしむる此の同じ發達そのものが、他方においては、熟練勞働を簡單化し、かくてその價値を輕減せしめつゝある。

同じ法則は他の形において得られる。勞働の生産力の發達と共に、資本の蓄積は、勞賃の比較的高き率にも拘はりなく、加速度を以て行はれる。

そこで或は、嘗てアダム・スミスが——彼れの時代には近代の産業はまだ幼稚であつた——論じたやうに、この資本の加速度的蓄積は、勞働者の勞働に對する需要の増加を確保することによつて、差引き勞働者側の利益になるものだ、と論ずる者があるかも知れない。それと同じ見地からして、現代の多くの論者は、過去二十年間イギリスの資本はイギリスの人口より遙に増加したに拘はらず、勞賃がそれほど騰貴してゐないのを、不思議がつてゐる。

けれども「實は」、資本蓄積の進行と同時に、資本の構成に遞増的な變化が起るのだ。全體の資本のうち、固定資本、即ち機械や原料やその他あらゆる形態における生産手段から成り立つてゐる部分は、資本の他の部分、即ち勞働の購買のため勞賃として支出されるものに比較して、次第に遞増してゐる。この法則はバアトン、リカアド、シスモンディ、リチャド・デヨン教授、ラムゼイ教授、シャープリー、その他の人々によつて、既に正

確な形に——その正確さには多少の差があるが——記述されてある。

資本の此等二つの要素の比例が元と一對一であつたとすれば、産業の進歩に伴ひ、それは五對一、乃至その他のものとなるであらう。もし總體の資本六百の中、三百が労働手段や原料やその他のものに放下され、三百が労働者に支出されてゐるのなら、三百人の労働者の代りに六百人の労働者に對する需要を作り出すためには、總體の資本が倍加されるべき可いわけだ。けれども、六百の資本の中で、五百が機械、原料、その他のものに放下され、労働には僅に一百しか支出されてゐないのなら、三百人の労働者の代りに六百人の労働者に對する需要を作り出すためには、同じ資本が六百から三千六百に増加しなければならぬ。だから、産業の進歩において、労働に對する需要は、資本の蓄積と並行するものではない。それは依然として増加はするが、しかし資本の増殖に比すれば、絶えず遞減的な比において増加するに過ぎない。

〔註三〕 資本論第一卷第七篇第二十三章（拙

著『資本論略解』第一卷第三分冊、七七頁以下）参照。

これら僅かの示唆は、近代産業の發達そのものが、労働者に對して資本家の方が都合が好くなるやうに次第々々に形勢を決定する筈になつてゐると云ふこと、ならびに其の結果として、資本家的生産の一般傾向は、労働の平均標準を高めるのではなくて却てこれを低め、労働の價值をば多少ともその最低限度に押し付けるものだ云ふことを、指し示すに十分である。だが、この制度内における事態の傾向は此の如くであるとしても、そのことは、労働階級が資本の蠶食に對する彼等の抗争を斷念し、且つ時々々の機會をば彼等の「境遇の」一時的改善のため最善に利用しやうとする企を放棄しなければならぬ、といふことを意味するのではない。彼等がもしさうしたならば、彼等は見放されて仕まつた慘敗者の一様なる平準の群に墮落して仕まふであらう。私は既に、労働の標準

に對して彼等が闘争するのは、全労働制度から離すことのできぬ附隨事件だといふこと、労働を引上げんとする彼等の努力は、百の場合のうち九十九までは、労働の與へられたる價值を維持せんがための努力に過ぎないといふこと、および彼等が労働の價格について資本家と争ふの必要は、彼等自身を商品として賣らなければならぬといふ彼等の状態に固有のものだといふこと、等を明かにしたと考へる。彼等がもし資本との彼等日々の衝突において臆病に退却するならば、彼等は明かに、より大なる運動を起すことにつき總べてその資格を失ふであらう。

だが、これと同時に、且つ労働制度に含まれてゐる一般的隷屬からは全く離れて、労働者階級はこれら日々の闘争の窮極の効果を、自分で誇大視しないやうにしなければならぬ。彼等の忘れてならぬことは、彼等は結果について戦つてゐるだけで、これら結果の原因と戦つてゐるのではないと云ふことだ、彼等は向下の運動を阻止しつゝある

だけで、その方向を變じつゝあるのではないと云ふことだ、彼等は姑息療法をしてゐるだけで、病氣を根治しつゝあるのではないと云ふことだ。だから彼等は、資本の飽くことなき蠶食や市場の變動から、絶間なく發生するところの、これらの避くべからざるゲリラ戦⁴に全く没頭して仕まはないやうに、しなければならぬ。彼等は、現時の制度たる、それは、それが彼等の上に課するところの一切の貧窮と共に、社會の經濟的改造に必要な物質的條件と社會的形態とを同時に醸成しつゝあるものなることを、理解しなければならぬ。彼等は、『正當なる一日分の労働に對して正當なる一日分の労働』といふ保守的の格言の代りに、彼等の旗印の上に革命的の警句『労働制度の全廢』を書き誌すべきである。

〔註四〕 ゲリラといふは、元とスペインの北部で用ひられた戦法で、本隊よりの指揮によらず、個々の獨立隊が不規則に小競合をなすこと。

當面の問題を公平に取扱ふため私の已むなく深入りしたところの、甚だしく長い、さうして恐らくは諸君に退屈な思ひをさせたであらう此の解説の後に、私は、次の「案」を提供して終を結ばうと思ふ。

第一。勞賃率の一般的騰貴は、一般利潤率の下落を齎すであらう、しかしながら、廣く言へば、諸商品の價格には影響せぬであらう。

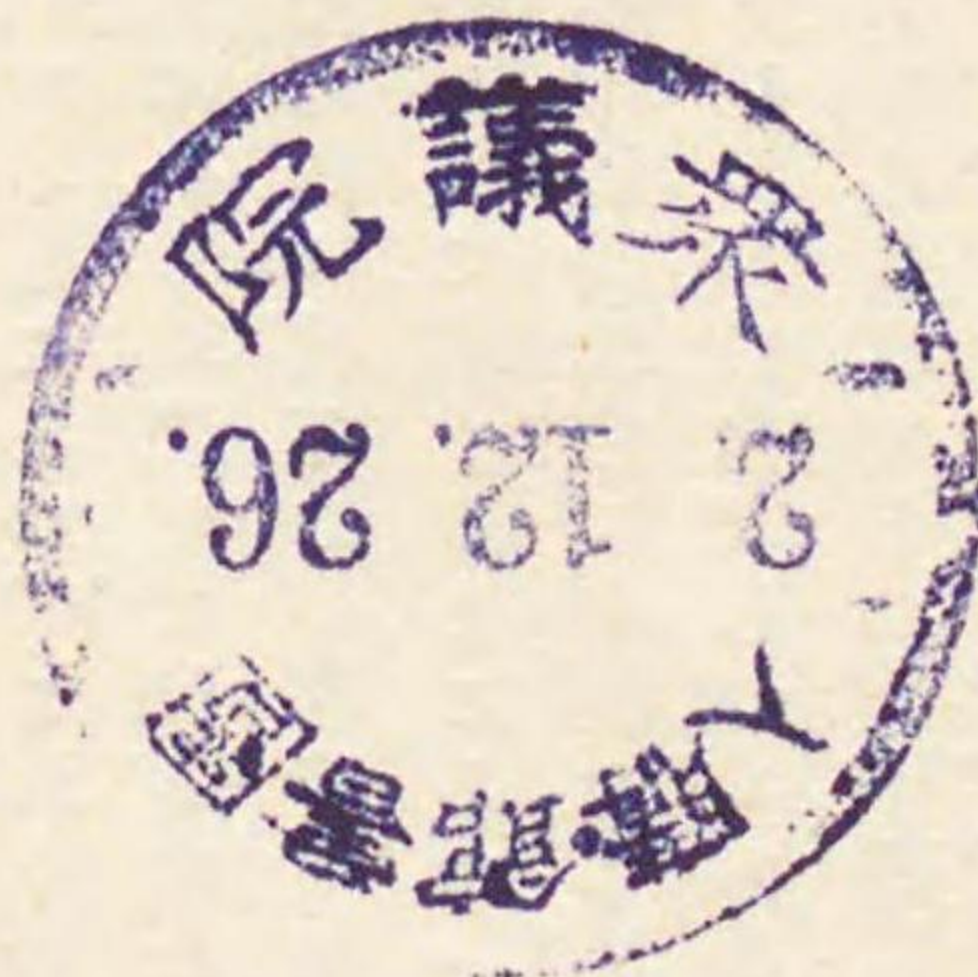
第二。資本家的生産の一般傾向は、勞賃の平均標準を高めるのではなくて、却て低める。

第三。勞働組合は資本の蠶食に對する抗爭の中心としては立派な働きをする。彼等は彼等の力の無分別なる使用のため、部分的に失敗する。「だが」彼等にして、もし現存制度の結果に對するゲリラ戦のみ自らを局限し、それと同時に現存の制度を變改せんと試むることなく、彼等の組織されたる力をば、勞働階級の最後の解放、即ち勞賃制度の窮極の廢止に向つての一槓杆として使用す

ることなくば、彼等は全般的に失敗する。

〔註五〕 現存の制度たる資本主義はそのまゝにして置いて、この制度から必然に生ずべき結果に對してのみ小ぜり合ひの戰爭を企つるに止まるならば、といふ意味。

3202
6



大正十年十二月一日發行
大正十年十二月五日發行
大正十一年七月十日發行
大正十三年八月一日改版發行
大正十五年五月十日發行

大正十五年八月一日改版發行
昭和二年六月十五日發行
昭和三年四月十五日發行
昭和四年六月十五日發行
昭和五年五月十日發行
昭和六年五月十日發行
昭和七年五月十日發行
昭和八年五月十日發行
昭和九年五月十日發行
昭和十年五月十日發行
昭和十一年五月十日發行
昭和十二年五月十日發行
昭和十三年五月十日發行
昭和十四年五月十日發行
昭和十五年五月十日發行

改正定價金貳拾錢



製複許不

譯者 河上肇

印刷者 八坂淺次郎

印刷所 弘文堂印刷部

京都府丸太町寺町東入

京都府東川通川端東入

發行所 弘文堂東京店

東京市丸太町寺町東入
電話 二〇〇九番
東京市東區淺草橋二丁目四番
電話 二七五二番

弘文堂東京店

マキルズ叢書

8.	7.	6.	5.	4.	3.	2.	1.
林野要 反野密 デユ ーリ ンゲ 論	河上 賃 勞 働 と 資 本	宮川 實 業 批 判 序 説	河上 マルクス 原 著 勞 賃 ・ 價 格 お よ び 利 潤	宮川 カ ン ト に 於 ける 辯 證 法	河上 階 級 闘 争 の 必 然 性 と そ の 必 然 的 轉 化	淺野 哲 學 の 貧 困	河上 レ ー ニ の 辯 證 法
著者 共譯、 エンゲ ルス 原 著	著者 マルク ス 原 著	著者 マルク ス 原 著	著者 マルク ス 原 著 (改 版)	著者 デボ ーリ ン 原 著	著者 必然性 と その 必 然 的 轉 化	著者 マルク ス 原 著	著者 デボ ーリ ン 原 著
税價 二・五 〇 一・八 〇	税價 〇・二 四 〇	税價 〇・四 〇 〇	税價 〇・二 四 〇	税價 一・〇 〇 〇 六 〇	税價 〇・五 〇 六 〇	税價 一・三 八 〇	税價 〇・五 五 〇 四
15.	14.	13.	12.	11.	10.	9.	
服部 英 太 郎 譯、 マルク ス 原 著	村山 藤 四 郎 譯、 マルク ス 原 著	猪俣 津 南 雄 譯、 プ ハ リ ン 原 著	水谷 長 三 郎 譯、 マルク ス 原 著	大山 一 郎 譯、 リ ヤ ザ ノ フ 原 著	經濟 學 批 判 會 編 唯 物 辯 證 法 (原 文 對 譯)	大山 一 郎 譯、 デ ボ ー リ ン 原 著	
著者 マルク ス 原 著	著者 マルク ス 原 著	著者 プ ハ リ ン 原 著	著者 マルク ス 原 著	著者 リ ヤ ザ ノ フ 原 著	編者 會 編	著者 デ ボ ー リ ン 原 著	
税價 一・五 〇 〇	税價 一・五 〇 〇	税價 一・四 五 〇	税價 一・四 五 〇	税價 一・五 〇 〇	税價 一・八 〇 六 〇	税價 〇・四 五 〇 四	

刊 續

行發堂文弘都京

マキルシズム書

8.	7.	6.	5.	4.	3.	2.	1.
河野 共著 マキルシズム 著者 現價 二・五 八〇	河上 共著 マキルシズム 著者 現價 〇・二 五〇	河川 共著 マキルシズム 著者 現價 〇・四 五〇	河上 共著 マキルシズム 著者 現價 〇・二 五〇	河川 共著 マキルシズム 著者 現價 一・〇 五〇	河川 共著 マキルシズム 著者 現價 〇・五 六〇	河川 共著 マキルシズム 著者 現價 一・三 八〇	河川 共著 マキルシズム 著者 現價 〇・五 五〇
	15.	14.	13.	12.	11.	10.	9.
	河野 共著 マキルシズム 著者 現價 〇・四 五〇	河川 共著 マキルシズム 著者 現價 〇・三 五〇	河川 共著 マキルシズム 著者 現價 〇・二 五〇	河川 共著 マキルシズム 著者 現價 一・〇 五〇	河川 共著 マキルシズム 著者 現價 一・五 六〇	河川 共著 マキルシズム 著者 現價 一・八 六〇	河川 共著 マキルシズム 著者 現價 〇・四 五〇
刊 續							
行 堂 文 弘 書 京							

